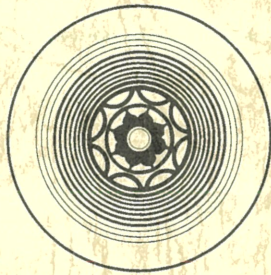


糸島市立
伊都国歴史博物館

紀 要

第13号



- 火山瑠璃光寺経塚関連資料と糸島地域出土の経筒……………河合 修
阿部洪太郎 (1)
- 福岡県立糸島高等学校郷土博物館所蔵資料紹介……………米倉 法子 (19)
- 伊都国歴史博物館所蔵の弥生～古墳時代木器
—池田中上町・大五郎遺跡、本田孝田遺跡出土木器—……………岡部 裕俊 (25)
- 青柳種信が見た泊大塚古墳
—『筑前国續風土記拾遺』に記された糸島半島の古式前方後円墳—
……………岡部 裕俊
中牟田寛也 (51・一)

2018





a. 瑠璃光寺経塚出土 青銅製経筒残欠



b. 青銅製経筒残欠(左：蓋、右：底部)



c. 青銅製経筒残欠(筒身残片)

卷頭図版2



a. 青白磁合子蓋(瑠璃光寺経塚出土)



c. 青白磁合子蓋と身①の組み合わせ



b. 青白磁合子身①(瑠璃光寺経塚出土)



d. 青白磁合子身②(瑠璃光寺経塚出土)



e. 鉢形陶製容器(瑠璃光寺経塚出土)



a. 山北経塚出土青銅製経筒



b. 山北経塚出土銅鏡



c. 山北経塚出土
青白磁合子蓋



d. 山北経塚出土
経巻紙残欠



e. 山北経塚出土滑石製石鍋



f. 山北経塚出土鉄器
(左：鉄刀、右：鉄剣)



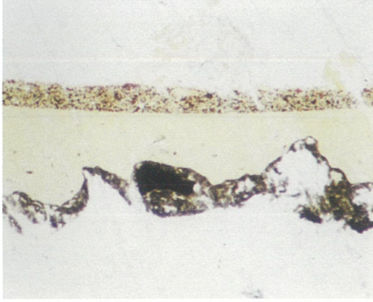
g. 山北経塚出土陶製外容器



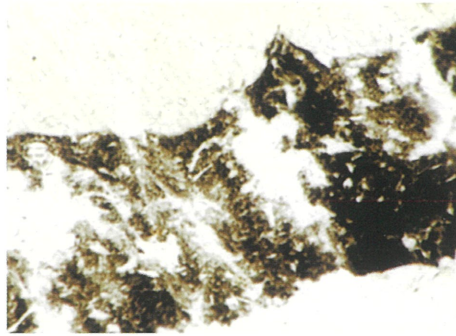
h. 二丈岳穴観音経塚出土陶製経筒

卷頭図版4

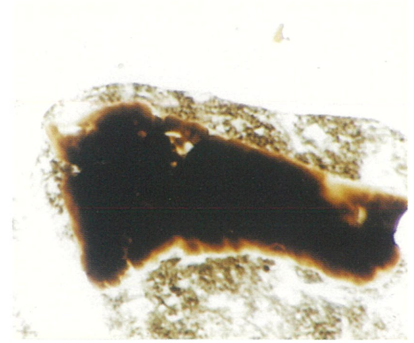




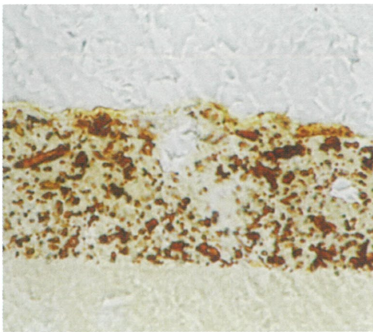
1.表面の漆膜 (×200)



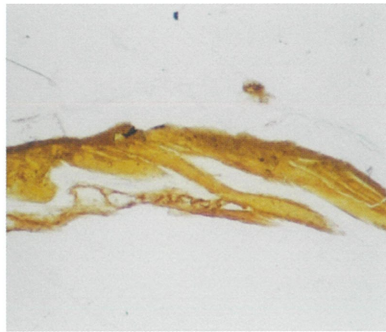
2.同上部の下地拡大 (1/1000)



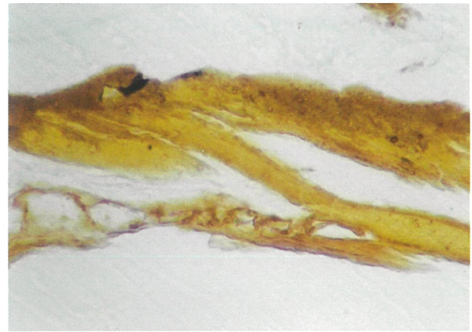
3.同上部の下地拡大 (×1000)



4.表面の赤色漆拡大 (×1000)



5.裏面の漆膜断面 (×200)



6.同上 (×400)



7.黒漆塗り容器底板 (裏面拡大)

序

本年度は、本市における文化財保護行政上における大きな転機を迎える記念すべき年となりました。長年の懸案となっておりました三雲・井原遺跡が国史跡に指定されたことです。本遺跡は古代における糸島地方最大の集落遺跡で、特に中国の歴史書「魏志倭人伝」に記された伊都国の拠点集落と考えられています。

「魏志倭人伝」には、伊都国が、代々王により統治されていたこと、その国力は周辺諸国も恐れるほどであったこと、また、漢や魏から派遣された官吏が滞在していた国際色豊かな地域だったことなどが記されています。糸島地方が、大陸社会との様々な外交交渉や経済活動を取り仕切る、倭人社会の政治経済の中核であったことがわかります。その舞台となったのが三雲・井原遺跡なのです。

このことを象徴するのが三雲南小路王墓です。文政5（1822）年に家の普請に伴う土壁採取中に、甕棺が発見され、なかからは大量の銅鏡が出土したことがその発端でした。1975（昭和50）年には再発掘され、ガラス璧、金銅四葉座飾金具など、漢王朝との強い結びつきを感じさせる貴重な資料が姿を現しました。

平成6（1994）年度からは市教育委員会による調査も始まりました。遺跡の範囲や構造についての情報が蓄積されるとともに、平成28年には弥生時代の石硯が出土したことで、改めて遺跡の重要性が注目され、急速に国史跡指定への機運を高めていくこととなりました。

今後は、遺跡の保存整備に向けての新たな段階を迎えることと思います。遺跡内部の調査や出土品の分析が進められ、重要遺跡としての評価がさらに高まるものと期待されていますが、その一翼を担うのが伊都国歴史博物館であると考えています。

今回の史跡指定を契機として伊都国の重要遺跡に、市民の誇りとしてにさらに明るい未来が拓かれることを願ってやみません。

平成30年3月31日

糸島市立伊都国歴史博物館

館長 岡 部 裕 俊

火山瑠璃光寺経塚関連資料と糸島地域出土の経筒

河合 修（伊都国歴史博物館）

阿部洪太郎

I はじめに

平成21年1月、福岡県糸島郡志摩町大字稲留1055-1(現糸島市志摩稲留)に所在する、火山瑠璃光寺境内近くの山腹斜面において、青銅製経筒を含む経塚資料が不時発見された。

本稿は、糸島地域とりわけ旧志摩郡域において希少な経塚資料の出土例となった、この火山瑠璃光寺経塚の発見経緯と出土遺物を報告・紹介するものである。

また、瑠璃光寺経塚の発見以後、平成26年に二丈岳山腹にて陶製経筒が発見され経塚群の存在が新たに確認される(註1)など、近年、糸島地域における新出の経塚出土事例も知られるようになってきた。

本稿は、博物館企画展の展示準備等に伴い少しずつ蓄積してきた資料調査の成果として、現段階における糸島の経塚関連資料の出土事例を集成し報告を行うものである。(註2)

II 瑠璃光寺経塚について

(1)発見の経緯

平成21年1月、志摩稲留区のある人物から当時の志摩町教育委員会社会教育課に連絡が入った。

糸島市志摩稲留の火山瑠璃光寺境内にある山王社(小堂)をすぐ横の隣接地に新設移転する工事で、それに伴い現境内地の平地を地上げするため、境内脇の丘陵から土砂を採取しようと重機で掘削したところ、バケツに石が引っかかりその石(組)に囲われた中から、多量の炭化物と共に遺物が出土したという。

発見当初、掘削者らはこれらが埋蔵文化財であると認識せず、付近の土ごと斜面下へ落とし、また境内地へ遺物ごと土砂を散布させてしまったらしい。後日、土砂の中に遺物片らしきものが混じっていることに気付いた人物が、遺物数点を採集して、志摩町教育委員会へ届け出たのであった。

町教育委員会は採集品の中に経筒片や外容器と

みられる陶器片などが含まれていることを確認し、急遽、現地の確認に赴き、発見者らから聞き取りを行って、出土位置の特定と出土状況の検分を行った。

出土位置は、旧本堂(現在の薬師堂)から東に20m程の位置で、標高で約175mを測る地点にある。ここは、火山山頂部の尾根の最東部にあたり、尾根から南東向きの斜面に位置する。出土地付近には、現状ではあまり広い平坦面などは存在していない。

残念ながら、検分時にはすでに、経塚の発見場所付近に関連遺構の残存を確認することはできなかった。経塚の元位置付近は削平された後、さらに上部から落とされた土砂に埋没しているものと判断された。

発見者らからの聞き取りによると、経塚は石組みに囲われた中から、多量の墨と共に遺物が出土したという。現地では、確かに周辺に炭の付着した人頭～拳大の亜円礫が数点みとめられたことから、経塚の標石あるいは石組み遺構等が存在していた可能性は高いものとみられる。

採集された遺物の大部分は、掘削により細く破断されてその多くを欠失していた。その為、残りの資料を採集するため、境内地に散布された土砂に篩をかけるなどして、残存遺物の収集を試みたが、最終的に経筒などの全ての部位が完形に揃うことはなかった。

これら瑠璃光寺採集資料は、発見者である稲留区民及び境内地の管理団体である雷山大悲王院の意向により、現在、志摩歴史資料館に寄託されている。(註3)

(2)古記録類にみる火山瑠璃光寺

ここで、当資料の出土した瑠璃光寺に関する古記録類などから、その境内地と発見箇所の歴史的背景をまとめておきたい。

瑠璃光寺が境内を構える火山は、玄界灘に面した標高224mの低山である。「筑前国続風土記」



図1 火山瑠璃光寺経塚出土地の位置と出土地の現況写真

によると、火山(日山とも記す)の名は、神功皇后が山上で火を焚いたことからついたとされ、また、海上からの外敵侵入の際に大宰府へ急を告げる狼煙山であったという伝承などもある。この山が古来より山上で火を焚き夜間の海上交通の目印となっていたことなどに、その名は由来しているのであろう。

この火山の山腹に境内を構えた瑠璃光寺は、山号を不知火山といい、真言宗に属す。本尊に薬師如来を祀り、また眼病に効く名水を産することでも有名で、現在も小堂ながら靈験あらたかな古刹として多くの参拝者を集めている。

稲留地区の個人宅には、本寺開創時の顛末等を記した『瑠璃光寺略縁起』(卷子・成立年不詳)が伝存している。以下、現存する『瑠璃光寺略縁起』の全文の読み下し文を転載する。(註4)

「(前欠) …薬師如来なり、我を此山に安置すべし」との給(〔宣])ひて、消るが如くに失なふ、上人感涙肝に銘し、百拜して雷山に帰り、諸堂建立成就し、又此山に來たり、手づから薬師如来・十二神将を彫み、「不知山瑠璃光寺」と名付けらるゝは山の頂上なり、其の本堂の跡を、いまに堂得と

いふ、其節沖の船、帆をさげざれば、風発て舟をくつがへさんとす、これに依り山の中辺に本堂を立替え奉る、其時南の大道を通るもの、下馬をせざれば必ず落る事、又度々なり、故に本堂の戸をたへず差詰奉る、

其の後、天文の初(1530年頃)、天火にやありけん、本堂御本尊・十二神将皆焼失に及べり、村中大いに是を悲しみけるに、程なく一村の男女、十五才を末とし、残らず夢の告にいわく、「我時節到来して火難にあへり、然りといへども、今壱岐国風本(勝本)の奥、山下に孫二郎といふ百生の木戸先、家に向へば右の藪の中に大きなる椿の木有り、其の木の中に隠れ居る也、急に舟を仕立、迎に参るべし」と、両夜続けて同じ夢、早々公辺に言上し、彼島へ渡り尋けるに、告のごとく孫二郎木戸の藪に、大木の椿有り、夢の告を語り其木を貰い請け、薬師如来・十二神将をきざみ奉る、不思議の異仏なり、其の焼たる山の中辺、いまに穢れたる物を上げず、爰を堂阜といふ草野なり、御本尊椿にてきざみ奉る後、此処に写し奉る、委しくは本縁起に見へたり、爰に略して是をかく瑠璃光寺略縁起終

以上によると、瑠璃光寺は雷山千如寺の開基である清賀上人によって開創されたこと、開創時に上人自らが彫ったとされる薬師如来像と十二神将を祀っていたこと、創建当初は火山山頂付近の「堂得」という場所に鎮座していたことなどが読みとれる。また、沖合いの船が帆を下げないと海が荒れることから、開創からほどなくして山の中腹に堂を移したとあり、その後、天文年間に一度本堂・本尊共に焼失し、壱岐勝本の樁材をつかって仏像を再び製作した顛末が記される。

現在の本堂にある瑠璃光寺本尊は、江戸時代に製作されたとみられる薬師如来立像で、旧本尊(縁起にある天文年間製作のものか)の尊像も現存しており、平成14年に修復されて、境内の薬師堂に祀られている。また、この縁起には登場しないが、雷山大悲奥院の記録類によると、千如寺の末寺であった瑠璃光寺は宝暦年間に雷山千如寺の僧、実相によって再興されたことがわかる。

以上の記録類から、瑠璃光寺の開創時期は、不詳ながらも雷山千如寺などと共に奈良時代まで遡る可能性があり、糸島地域で最も古い時期に開創された寺院のひとつと捉えることができる。また、現在の瑠璃光寺は火山山腹に南方を正面として境内を構えるが、これは元来、山頂付近(堂得という地名が今も残る)にあったものが現境内地へと移転したとみることができ、その移転時期は、(1)創建からほど近い時期、(2)天文年間、(3)宝暦年間の三つの時期のいずれかであった可能性が考えられよう。

本報告の経塚資料の埋納された時期が、一般的な経塚の埋納時期(11世紀末から12世紀前半)と想定すると、(2)(3)が移転時期ならば、それより前に現地(現境内地近く)に埋納されていたことになる。経塚群が形成されてまもない時期にそれを壊す可能性のある隣接地を造成し新たに境内を形成することは考えにくいことから、山頂付近にあった本堂は、創建からほど近い時期に現境内地に移転してきたとするのが妥当であると考えたい。つまり、創建からほど近い時期に現境内地に本堂が移転し、その近くに経塚群が形成されたのではないかと推察されるのである。

(3)瑠璃光寺経塚の採集遺物 (図2)

以上の経緯で採集された遺物の中で、経塚に関

連していると思われる遺物には、青銅製経筒片(1点分)、白磁合子(蓋1点・身2点の計3点)、外容器とみられる陶製壺がある。以下にこれを紹介する。

銅製経筒 (図2-1)

銅製経筒片は、バラバラに分散して採集されているが、八花形でつまみ付きの蓋部、薄い円盤の底部、ゆるく屈曲した高台1段がつく基部片、断面が変形した筒身片多数などがあり、これらで1本分のものであろうと考えられる。

蓋部は、宝珠つまみをもつ平面が八花形の被覆式傘蓋で、高さ約3.5cm、内径約10.5cmを測る。全体的にやや大ぶりの感がある。蓋部外表面には所々に鍍金された痕跡が観察できる。

筒身は全体的に器壁が非常に薄く脆いため破損が著しい。また、削平され発見される前から、既に土圧等で器形が変形していたようであり形状の復元が困難である。最も残りの良いもので残存高約8cmの1段分しか残存しておらず、積上段数などは不明である。

これら残存する筒身片には鋳留や銅板をあわせた継ぎ目などはみとめられないため、一鑄のものと考えられる。また、筒身片の中に突帯が一条分確認できることから、いわゆる四王子型に類するものであった可能性がある。

基部片は残存高約4cmを測り、ゆるく屈曲した高台1段がつく。

経筒の底板となると考えられる薄い円盤は、直径10cm・厚さ約0.2cmを測る。銅板表面は錆びついており、文様等は確認できないが、丸い経巻の付着跡が6箇所確認される。妙法蓮華経は8巻あるいは10巻であることが一般的であるため、その大きさなどからみて元来は8巻納入されていたものと考えられる。

筒身の遺存状態が悪く形状等に不明な点も多いが、蓋部等の形態的特徴から12世紀前半頃の所産であると考えている。

青白磁合子 (図2-2・3・4)

副納品と考えられる青白磁合子である。蓋1点・身2点分があり、少なくとも2セット分が出土している。蓋身が1組はセット関係となる。共に側面に菊弁文を配し、蓋は29弁、身は32弁を数える。外面の文様は、果実文と考えられる。

類例に保安元年(1120年)の京都府鞍馬寺経塚

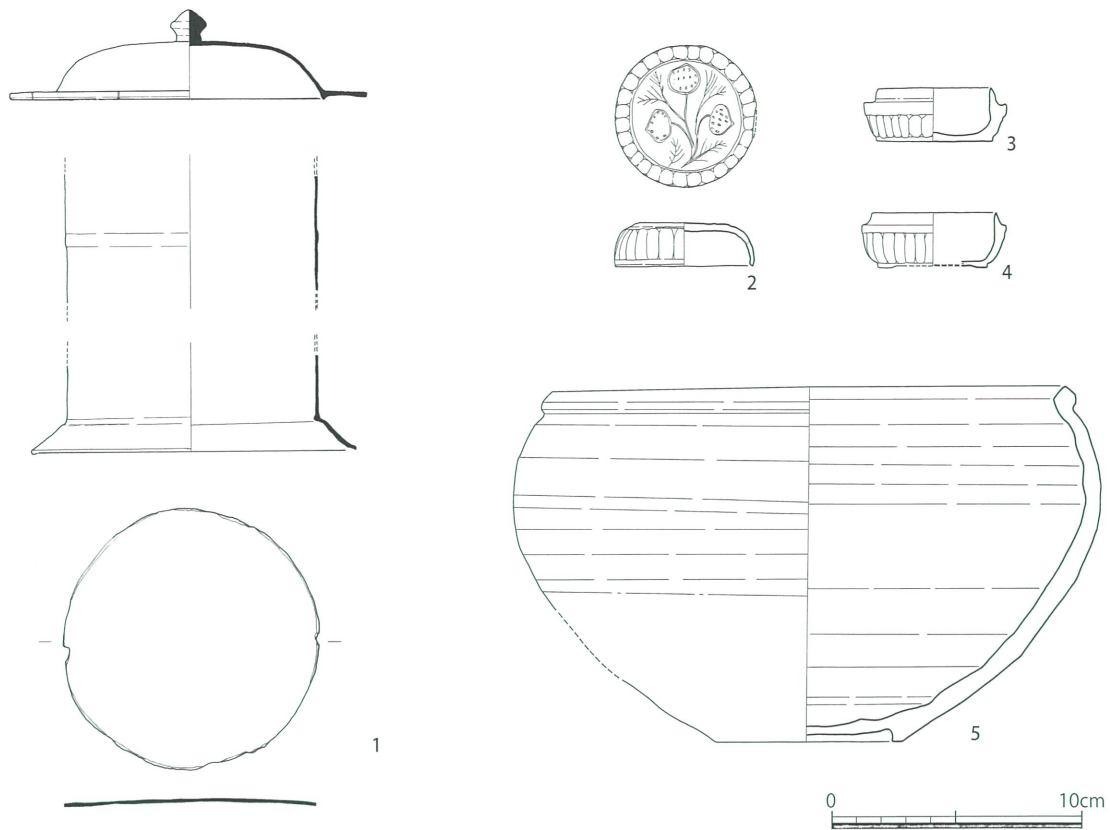


図2 火山瑠璃寺経塚出土遺物 (1/3)

出土品及び博多遺跡群R 4次調査地点出土のものがあり、ほぼ同時期の所産であると推定される。

鉢形陶製容器 (図2-5)

鉢形の陶製容器である。高さ14.2cm・口径20.5cm・底径7.8cmを測り、断面が玉縁状の丸く肥厚した口縁を呈する。

暗茶褐色の釉を体部内面から外面にかけて施し、体部外面の下位と外底部は露胎である。外面下位に回転ヘラケズリを施し、底部はやや上底となる。

これを経筒を納める外容器と考えた場合、単体では、高さが経筒より低くなると考えられ、何かしら別のものと組み合わせるなどしなければならない。

時期的も経筒・青白磁合子とはやや後出のものと考えられるため、同一の経塚から出土したものとは断定しにくい。

以上が瑠璃光寺経塚に関連すると考えられる主要な遺物である。経筒も筒身の大半を欠失するなど、これらの遺物がすべて同じ経塚のものか、は

たして単体（1基分）しか存在していなかったのか、などをこれらの資料から特定するのは、残念ながら困難な状況である。現在のところ、不明となっている欠失部分も含め、他にも相当数の遺物片が斜面土砂の中に埋没しているものと考えられる。

(4)瑠璃光寺経塚出土の意義

瑠璃光寺経塚の発見は、旧志摩郡西部域(旧志摩町域)において初めての経塚関連資料の出土であり、また出土状況や出土品の全体像は不明ながらも、出土地点を特定できた希少な事例となった。

出土品は、遺存状況がたいへん悪く、詳細を掴みにくい。銅製経筒はいわゆる四王子型に類する可能性のあるもので、筒身は大型に復元でき、蓋の一部には鍍金を施すなど、手の込んだつくりのものであったと評価される。

これら出土した経筒や副納された青白磁合子の形態から、埋納時期は12世紀前半頃の所産であったと推定しているが、一緒に採集された鉢形陶器の時期がやや後出のものともみられる点が少し気が

かりである。

本経塚が発見された瑠璃光寺を擁する火山は、これまで海上の目印として信仰の山であったとの伝承が知られてきたが、今回の経筒の出土によって、少なくとも中世までには、山頂部から現境内地付近にかけて山岳仏教寺院が存在し、信仰の拠点となっていたことが明確になったといえる。

また、当寺の開基が、糸島において他の経塚資料の出土が知られる、雷山など背振山系の山岳寺院と同じ「清賀上人」であることにも留意しておく必要があるだろう。後述するが、こうした渡来僧に由来がある山岳寺院の所在地と経塚の出土地との関連性も高い傾向がみてとれる。さらにいうならば、それらの寺院の立地は、今回の火山瑠璃光寺のように、その多くが玄界灘を見渡すことができる、あるいは海から見た場合のランドマークとなる山の頂部付近をおさえている。こうした立地にみえる中世の寺院造営と玄界灘の海上交易活動との関連性も指摘されるのである。

III 糸島地域出土の経塚関連資料集成

(1) 糸島出土の経塚資料

本項では、先述した瑠璃光寺経塚を含め、これまで出土した糸島地域の経塚資料を集成する。

糸島では、これまでに12箇所、経塚出土地が知られている。近年では、平成26年に二丈岳山頂近くの穴観音にて陶製経筒が発見されるなど、新たな発掘事例も知られるようになったが、それ以前の多くが不時発見であったり、また、発見から長期間が経過し記録類が散失してしまっており、出土位置・出土状況を特定することが困難なものが多い状況である。

以下、a～kまで出土地と出土遺物について概要をまとめてみたい。

a. 如意経塚（糸島市大門）（表3-a）

高祖山西麓に如意とよばれる集落があり、この集落の東奥に位置する妙立寺の北側、南向きの斜面で、昭和42(1967)年に発見されたとされている。

如意経塚の出土遺物は、後述する大門経塚の出土遺物とともに、福岡県立糸島高等学校郷土博物館(以下、郷土博物館)に収蔵されている。しかし、現段階では、如意経塚と大門経塚とでどの遺物がどちらの経塚から出土したかについて、はっきり

断定できない状況になっている。本稿では、昭和22(1947)年に作成された糸島中学校郷土室の『考古目録』、昭和47(1972)年に作成された『前原町文化財地名表』(以下、『地名表』)(註6)、小田富士雄氏の報告(註5)を参考にして資料を紹介する。

如意経塚出土の遺物は、『地名表』によると「銅製経筒3、外筒一組など」となっている。小田氏は、銅板製経筒と青白磁合子を如意経塚出土と報告している(註5)。

銅(板)製経筒 (図3-1)

方形銅板を蓋とする銅板製経筒である。筒身は1枚の銅板を丸めて鋳留し、口縁部を1枚の鉄帯で巻きつけている。筒身下部を折り曲げ、別づくりの銅板をはめこんでいる。内底面には、経巻1巻分の痕跡が確認される。筒身は復元高24.0cm、口径7.0cm、底径9.5cmを測る。蓋は厚さ0.2cm、約12.0cm×約11.0cmの方形を呈し、ほぼ中心に径0.5cmほどの孔をあけている。蓋の片面には、筒身の口径と一致する円形の痕跡が残る。

また、この銅板製経筒にともなっていたと考えられるガラス玉が85点ほど残存している。その中には孔中に銅線が入ったまま残っているものもあり、銅線をとおし繋ぎあわせて使用していたことが推察される。武蔵寺4号経塚(福岡県筑紫野市)出土の銅板製経筒にみられるように、ガラス玉は、経筒の蓋の孔から瓔珞として垂下して使用する場合が多い。宮小路賀宏氏は、瓔珞と異なる装飾法の例として、特別史跡水城跡の西門跡に接する土塁上で発見された経塚出土遺物をあげている。この経塚からは、銅板製経筒とガラス玉378個、金銅製飾金具5種10片が出土しており、宮小路氏は、この経筒の蓋に瓔珞を垂下するための孔がないことから「ガラス玉を飾り金具や銅線・鎖でレースに編み、まるで花嫁を飾るブーケのように経筒に被せたのではないか」としており、瓔珞以外の装飾法を想定している(註7)。本経筒も蓋の一隅に孔があいていたような痕跡がみられながらも、垂下に適さない中心部にも孔があることや蓋と筒身を固定させる必要性があることなどから、経筒の緊縛と莊嚴をかねて巻きつけていた可能性も考えられよう。

銅製経筒 (図3-2)

法量は総高27.5cm、筒身高24.7cm、口径

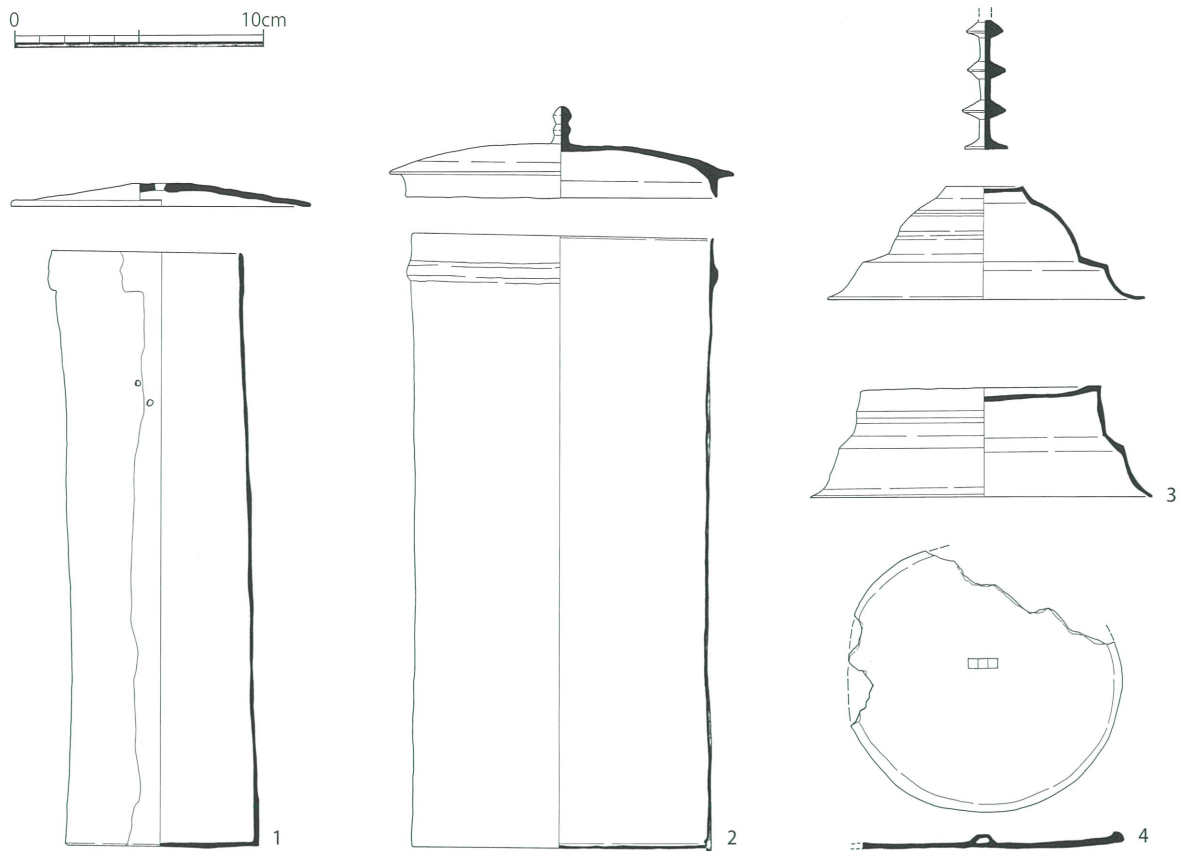


図3 如意経塚・大門経塚出土遺物 (1/3)

11.5cm～12.0cm、底径12.0cmを測る。銅板をはりあわせた痕跡などがみられないため、铸造により製作されたものと考えられる。筒身上部には突帯を1条もち、下部は底板の銅板をはめ込めるように内側に細工がなされている。内底面には、経巻の痕跡が8巻分確認できる。蓋は高3.7cm、径12.3cmほどの傘蓋で、宝珠と簡略化されたと思われる相輪が1輪ついた刹がある。

滑石製外容器

箱状の大型の滑石製外容器である。4分の1程度が石膏で復元されており、破損部は蓋と身をあわせた場合に符号する。蓋は高13.7cm、身は高15.3cmほどで身部の口径は復元34.0cm×20.5cmを測る。この中に経筒等を納入していたと考えられる。

青白磁合子

壺型合子である。蓋はなく、身のみ残っている。高3.5cm、復元口径2.7cm、底径2.7cmを測る。なお、この壺型合子の類例としては、山田経塚出

土遺物(福岡県宗像市)、武蔵寺第10号経塚出土遺物(福岡県筑紫野市)などがある。

紙本経残欠

炭化状になっている経巻残欠である。どちらの経筒に伴うものかは定かでない。軸部を観察すると、径が約0.15cmと非常に細く、笹などを軸部として用いていたことが考えられる。

b.大門経塚 (糸島市大門) (表3-b)

如意経塚の南西部に位置する大門地区で発見されたと伝わる。『考古目録』では、大正15(1926)年の10月5日に岸原義亮氏によって、「小山の土取りの際に地下一丈ばかり椎の大木下」から出土したと記されているが、出土状況等の詳細についてはこれ以上の情報はない。

ここでの出土遺物は、『地名表』によると、「銅製経筒1、刀子、湖州鏡1など」と記されている。小田氏は、積上式経筒を大門経塚出土と報告している(註5)。

銅製経筒（積上式経筒）（図3-3）

筒身を欠失しているが、相輪刹・蓋・台座が残る積上式経筒である。

筒部の段数は不明。相輪刹は頂部が欠けているが、算盤玉状の相輪が3輪あり、基部は平滑になるよう調整し、蓋の頂部に孔があいていないことから相輪刹を蓋に据えて置いていたことがわかる。残存高6.3cmを測る。

蓋は平面四花形の傘蓋で、高4.5cm、最大径12.7cmを測る。台座は平面五花形で、頂部はやや凹面になる。高さ4.3cm、頂径9.7cm、最大底径4.3cmを測る。蓋・台座ともに体部に数条の沈線が廻る。

銅鏡（図3-4）

断面方形のつまみをもつ平面円形の銅鏡で、断面はやや凹面に湾曲している。『地名表』にある湖州鏡と考えられるが、「湖州」の陽刻痕跡などがみられず、素文鏡とみたほうが妥当であろう。厚さ0.2cm、復元径11.0cmを測る。

刀子

残存長23.5cmを測る刀子が1点出土している。

c. 築山観音堂経塚（糸島市三雲）（表3-c）

糸島市三雲に所在する。現在、築山観音堂という小堂の敷地付近で、舶載の灰緑色無釉の陶製経筒片や秋草文のある青白磁合子蓋の半欠などが採集されている。当該地は、4世紀後半頃築造とみられる築山古墳の墳頂部にあたり、墳丘上に経塚があったと考えられる（註8）。

他にも現観音堂付近には、中世に遡れる板碑や五輪塔などの部材が散見され、当該期に寺院が存在していた可能性が高い。

d. 飯氏経塚（福岡市西区飯氏）（表3-d）

飯氏経塚は、福岡市西部の今宿平野を望む山麓上にある兜塚古墳の墳頂部に位置する。

兜塚古墳は1994年度から継続して行われた発掘調査により5世紀後半の前方後円墳であることが判明し、鋌留短甲や馬具類などが出土している（註9）。

経筒等の資料は、その発掘調査以前に発見されていたもので、詳細な出土状況は不明であるが、出土経筒とともに凶面が保管されている。また、『周船寺村誌』には、昭和33(1958)年3月23日

に墳丘上部を納骨堂用地として整地した際に塚の中心部から発見されたと記される（註10）。

出土遺物は、銅製経筒と土製外容器があり、現在、銅製経筒は福岡市博物館に、土製外容器は糸島高校附属郷土博物館に収蔵されている。それぞれの遺物が別々に収蔵された経緯ははっきりしていないが、銅製経筒については、元来は飯氏経筒保存会が保管していたが、福岡市教育委員会に寄贈された後、福岡市博物館に移管されたという。

銅製経筒（図4-1）

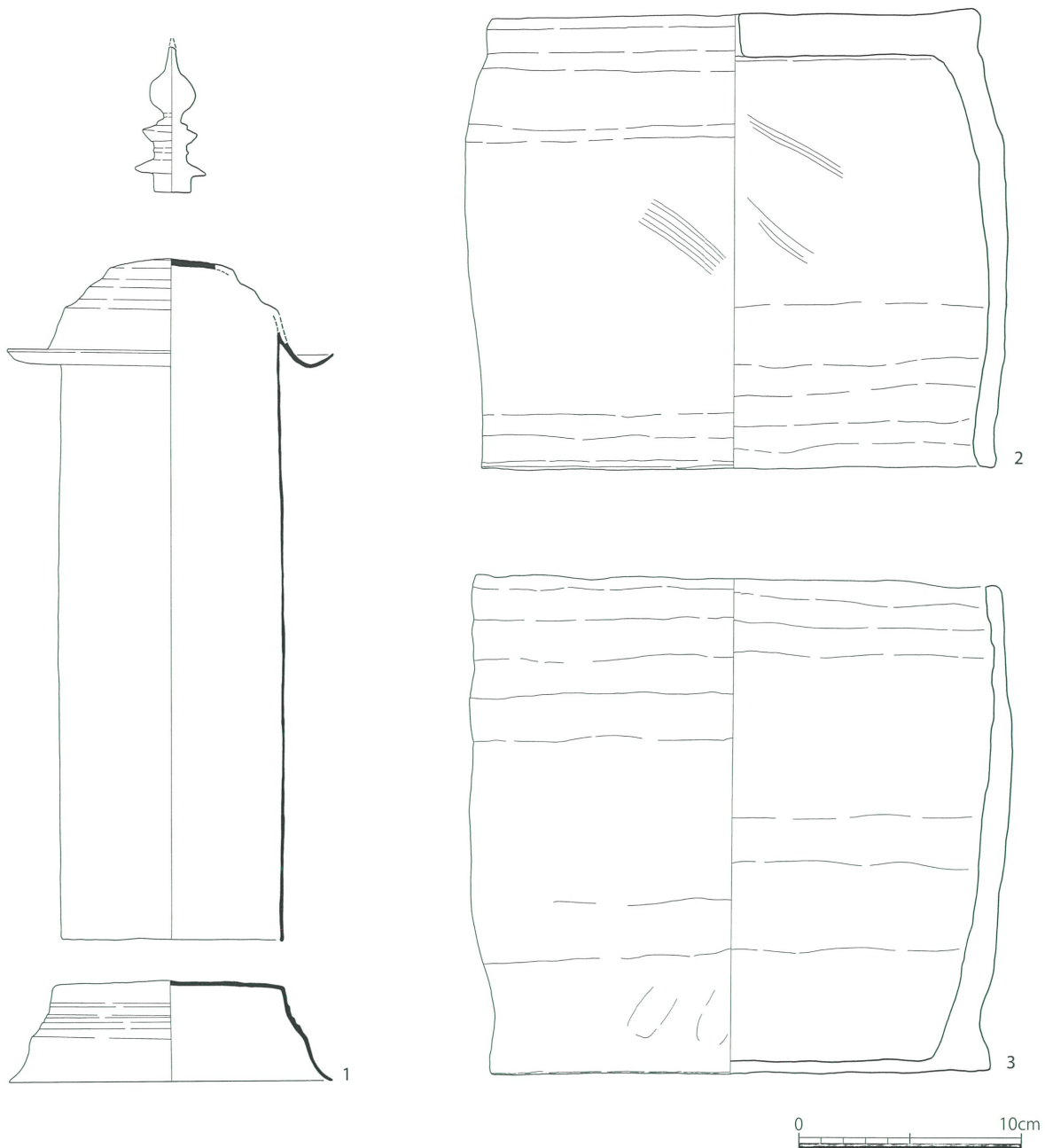
二つの鑄造製の半円筒を縦に継ぎ合わせて筒身にする半円筒接合式経筒である。総高は44.5cmを測る。

相輪刹の頂部は少し欠けているが、球状の宝珠を頂き二輪をつけるもので、蓋に据え置きされる。相輪刹の残存高は6.7cmを測る。相輪刹基部は、平滑に調整した後に「×」印をつけているように観察される。蓋は平面円形で反りのある縁をもっており、頂部に相輪刹の基部の印と符合するような「×」印をつけている。高さ5.0cm、最大径15.0cmを測る。

蓋と身はくっついて一体化している。筒身は高さ28.3cm、径10.1cmを測り、内部に溶接して繋げた痕跡がみられる。台座は平面円形で、高さ4.5cm、底径14.6cmを測る。台座の頂部は平滑に整えようと、調整痕が残るが、やや凸面となっている。蓋、台座ともに数条の沈線を廻らせる。

近年、この銅製経筒と近似したものが、佐賀県唐津市の古園遺跡SX03経塚から出土しており、調査を担当した小松譲氏によって詳細な資料の比較・検討がなされている。一見、本経筒は積上式経筒と構成が似ているが、小松氏は相輪刹、蓋、筒身、台座の各部位の分類をおこない、積上式経筒の各部位の組み合わせと異なることを指摘している（註11）。この見解に従えば、古園例に形態がよく似た本経筒についても、積上式経筒とは別の一群に位置づけられると考えられる。

本経筒の類例としては、先述の古園遺跡SX03経塚出土例とは別に、奈良国立博物館収蔵の伝大分県出土例（註12）があり、小松氏は、この3例を「同鑄型経筒であり、同一工房で製作された」と考えている。また、福岡市西油山経塚出土と伝わる経筒の中に、相輪刹の形など少し異なるもののその他の部位がよく似た資料が存在しているこ



第4図 飯氏経塚出土遺物 (1/3)

ともここで指摘しておきたい(註13)。

土製外容器 (図4-2・3)

円筒形のほぼ径の等しい櫃形の土器が2点あり、両者の口を双方合わせて外容器として使用したとみられる。このような形状の外容器は非常に珍しいものといえる。

この土製外容器は、素焼き粗製のもので、調整もあまり施されておらず、器体の内外面に積み上げられた粘土紐帯の接合跡が顕著に残る。

身であると考えられるほうの容器は、高さ22.3cm、口径23.6cm、外底径22.8cm、内底径18.0cmを測る。内底面には、うっすらと経筒の台座跡が残っており、これを復元すると現存する経筒の径とほぼ一致する。

蓋であると考えられる容器は、高さ20.5cm程で、外頂径21.9cm、内頂径18.0cm、口径22.5cmを測る。頂部のほぼ中心に内側から穿孔されている。孔付近には青緑色の色素付着痕があり、宝珠先端

部が密着していた跡と考えられる。

実際に、これらの容器を合わせても、経筒の高さには若干足りないことから、それを補完する形の処置で穿孔を施したのであろう。蓋、身ともに内外面の所々に炭が付着しており、木炭を内外に充填して埋納した様子が窺える。

e. 伝井原経塚（糸島市井原）（表3-e）

出光美術館が所蔵する積上式経筒に「福岡県糸島郡怡土村大字井原」の付箋が伴っており（註14）、現在の糸島市井原近辺で出土したものと伝わる。出土地・出土状況等の詳細は不明である。

銅製経筒

総高36.7cmを測る二段積上式経筒である。相輪利は蓋の頂部に孔をあけ挿入している。相輪利の頂部は欠損しているが、本資料を観察した小田氏は平形の相輪が3輪あったのではないかと推測している。

蓋は平面円形で、高さ5.4cm、径16.6cmを測る。筒身上段は径10.05cm～10.2cm、高さ12.9cm、筒身下段は径9.95cm～10.25cm、高さ13.6cmを測る。

台座は平面円形で、高さ3.1cm、底径14.7cm、頂部径11.0cmを測る。蓋、筒身、台座ともに、体部に沈線が廻っている。これらの表面には全体的に木炭片が付着している。

f. 伝今宿経塚（福岡市西区今宿）（表3-f）

出光美術館が所蔵する積上式経筒に「福岡県糸島郡今宿村今宿」の付箋が伴っており（註15）、現在の福岡市西区今宿近辺で出土したものと伝わる。出土地・出土状況等の詳細は不明である。

本資料について、桃崎祐輔氏は、怡土郡七ヶ寺のひとつである鉢伏山金剛寺に関連する経塚であると推測している（註16）。これに対し、大庭康時氏は、金剛寺の所在地は大字上の原に含まれ、大字今宿とは隔たった立地であることから即断はできないとしている（註17）。

銅製経筒

総高43.85cmを測る段数四段の積上式経筒である。相輪利は宝珠と算盤玉状の相輪が4輪あり、相輪利を蓋に据え置いている。相輪利付の蓋は平面円形で、高14.25cm、径12.9cmを測る。

筒身は、径9.2cm～9.3cm、高6.65cm～6.9

cm、厚さ0.1cmの円筒4個を積上げている。台座は平面円形で、高4.1cm、底径14.2cmを測る。

なお、この経筒には4個の円筒を重ねた最上段から最下段の外面と、最上段円筒の内面に墨書銘が記されている。銘文は以下のとおりである。

[表面の銘文]（/と／は筆者による加筆で、/が沈線、／が段の区切りを示す）

/為／尼/妙経／尊/靈／往生/施入
/保延／二年/十月／廿一日/乙卯／李太/子之

[最上段円筒内面の銘文]

李太子為勝母尼妙経為往生施入如右

この銘文によると、本経筒は李太子なる人物が母尼の追善供養のために埋納したものであることがわかる。この李太子について、小田氏は、万寿3(1026)年、関白藤原頼通に名籍を進め宝物を献じて日本の爵位を望んだ周良史の例を念頭に置いた上で、「母を日本人とする国際混血児であり、博多周辺に居留地をもっていたものであろう（中略）太子の称を記しているからには宋朝貴族に系譜上の縁故を求めた人物であろうが、それが事実であったか、また日本での居留、活動に優利を考えたための詐称であったかは不明というほかはない」としている（註18）。桃崎祐輔氏は、この「李太子」を訓読した場合「りのおおいこ」となり、女性であった可能性も指摘している（註19）。また、服部英雄氏は、大分県豊後高田市加礼川出土の銅箱の「太中臣六子・太中臣中子・太中臣太子」の記述から、それぞれが区別されているとし、「太子」について長女を指すものと判断した。さらに、唐より招来されたとなっている京都府清凉寺釈迦堂本尊の胎内文書に「施大娘・杜太娘・徐大娘」とあることから、中国では長女を「太娘」と表わすとし、「太子」表記は日本人が銘文を記したという理由だけでなく、事実上の日本人化の表れとしている（註20）。

女性と経塚の関係について述べた山川公見子氏は、女性の立場を「一つ目は女性が埋経作善の願主および施主あるいはそれに準ずる場合、二つ目は女性が埋経作善に従属的な結縁の場合、最後は男性が女性の供養等のためにおこなった埋経の場

表1 中国人銘経容器（桃崎2012を改変）

番号	出土地	経塚遺物	年代	中国人関連銘	銘文	共伴遺物	立地	遺構	所在	参考文献
1	首羅山白山神社経塚 (福岡県糟屋郡久山町)	四段積上式経筒	1109	台座裏に「徐工」墨書。 桃崎2008・2012では「工」を花押や略押の可能性ありとしている。この横に文字を訂正した跡がある。	「奉納志／敬白／如法蓮華經六十六／部内書寫一門普屬／代々息災延命七難／即絶爲妙香現世二／世安穩乞大願／爲奉納也／施主□□□□／天仁二巳丑□□□□日／大勸進僧 実□」	黄釉鉄彩四耳壺1 (外容器)、舌口式短刀1、八花形湖州鏡1、平形合子1	山頂	不明	九州歴史資料館蔵	宮小路1999、桃崎2008、2012
2	英彦山北岳(福岡県田川郡添田町)	三段積上式経筒	12世紀前半	台座裏面に「王七郎」墨書。宮小路・根来・磯村1985では「王七房」。		木炭	山頂	有室	英彦山神宮蔵	宮小路ほか1985
3	伝大宰府北山(福岡県大宰府市)	四王寺型経筒	1121	「宋人友諒并妻子蕭々等」	「大宰府北山／清瀧寺住僧(純)仁并 助成／宋人友諒并妻子蕭々等／爲現當二世之悉地圓滿也仍記之供万歳／保安二年玖月廿九日□」	不明	不明	不明	和泉市久保徳記念美術館蔵	中野1990
4	若杉山佐谷観音谷1号経塚(福岡県糟屋郡須恵町)	二段積上式経筒	1125	「宋人馮榮 伏」弟子鄭彦	「乙巳年六月初二日 宋人馮榮伏／執筆僧源琳 清秀／嚴淨寛義／禅宗 延範／□□ 寛□／妙法蓮華經 弟子鄭彦／天治三年 丙午次日辛未／勸進僧経尋／散位藤原朝臣末貞／□□□□」	素焼壺1 (外容器)、木炭	山腹	無室	東京国立博物館蔵	島田1926、蔵田1966
5	伝福岡県福岡市今宿(福岡県福岡市西区今宿)	四段積上式経筒	1136	「李太子」。表面と最上段円筒内面に墨書。	表面「爲 尼妙経 尊靈 往生施入／保延 二年十月 廿一日乙卯 李太子之」最上段円筒内面「李太子爲勝母尼妙経爲往生施入如石」	不明	不明	不明	個人蔵(九州国立博物館保管)	小田1980
6	伝大分県宇佐(大分県宇佐市)	四段積上式経筒	1139	「陳」浮。蓋裏に「陳□」浮墨書。森井2008では「陳□□」としている。	「奉□我□法□□□陳□／(一行不明)／保延五年十月□日(勸)進僧寔喝」	褐釉鉄彩四耳壺1 (外容器)	不明	不明	九州国立博物館蔵	森井2008、桃崎2012
7	伝福岡県(福岡県)	四段積上式経筒	1141	台座裏に「陳」墨書。	「保延七 年歲次辛酉二月 十五日勸進 延暦寺族姓大神／僧定尋長寿丸」	滑石製外容器1	不明	不明	奈良国立博物館蔵	奈良国立博物館1977、三輪1985
8	伝筑後地域(福岡県筑後地域)	陶製経筒IB類	12世紀	底部に「李」墨書。		不明	不明	不明	所在不明	小田1966
9	豊前坊経塚(1号)(福岡県遠賀町)	陶製経筒IC類	12世紀	蓋裏と底部に「仁」墨書。		青白磁合子片	古墳墳丘上	無室		
10	豊前坊経塚(2号)(福岡県遠賀町)	陶製経筒IC類	12世紀	蓋裏と底部に「仁」墨書。		なし	古墳墳丘上	無室	遺賀町教育委員会蔵	宮小路ほか1996
11	豊前坊経塚(3号)(福岡県遠賀町)	陶製経筒IC類	12世紀	底部に「仁」墨書。		なし	古墳墳丘上	無室		
12	四王寺山四王寺道経塚群B経塚(福岡県糟屋郡宇美町)	陶製経筒IA類	12世紀	底部に「莊綱」墨書。※亀井氏は「莊納」墨書としている。		木炭	上方山腹	有室	大宰府天満宮蔵	小田1966、亀井1986
13	四王寺山毘沙門堂経塚群B-2経塚(福岡県糟屋郡宇美町)	陶製経筒IC類	12世紀	底部に「陳□」墨書。		陶製経筒IA類2、経巻残欠、木炭	山頂	無室	福岡県立筑紫丘高等学校(九州歴史資料館保管)	島田1927、小田1966、九州歴史資料館2012
14	伝四王寺山(福岡県糟屋郡宇美町)	陶製経筒IA類	12世紀	底部に「陳」墨書。		経巻残欠1	不明	不明	九州国立博物館蔵	森井2008
15	京ノ隈経塚(1号)(福岡県福岡市西区田島)	外容器蓋(黄釉鉄絵花文大盤)	12世紀	外底部に「支□」の墨書。		銅板製経筒1、須恵器蓋1 (外容器身)、埴形合子3、平形合子1、鉄鍬2、刀子1、毛抜き1、宋銭1、数珠玉多数、木炭	古墳墳丘上	有室	福岡市博物館保管	山崎1976
16	出土地不明	陶製経筒IA類	12世紀	蓋裏に「陳」墨書。		不明	不明	不明	九州歴史資料館蔵	九州歴史資料館2012

*陶製経筒の分類は杉山1998を参考にしている。

表3の参考文献

- 小田富士雄1966 「九州発見の陶製経筒」『日本歴史考古学論叢』吉川弘文館
 小田富士雄1980 「出光美術館所蔵の九州発見経筒」『出光美術館館報』32 出光美術館(小田富士雄1988 『九州考古学研究歴史時代各論編』小田富士雄著作集6 学生社、収録)
 亀井 明徳1986 「綱首・綱司・綱の異同について」『日本貿易陶磁史の研究』同朋舎
 九州歴史資料館2012 『北部九州の壺山と経塚』九州歴史資料館
 蔵田蔵1966 「経塚論十二、東京国立博物館保管、九州地方出土の経塚遺物(上)』『MUSEUM』181 東京国立博物館
 島田寅次郎1926 「築造時代の明らかなる経塚」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告』2 福岡県
 杉山洋1998 「北部九州の陶製経筒」『植崎彰一先生古希記念論文集』真陽社
 中野徹1990 「181 青銅 経筒 伝大宰府北山出土」『増訂和泉市久保徳記念美術館蔵品選集』和泉市久保徳記念美術館
 奈良国立博物館1977 『経塚遺宝』東京美術
 宮小路寛宏・根来昭仁・磯村幸男1985 『英彦山修験道遺跡』添田町教育委員会
 宮小路寛宏・武田光正1996 『豊前坊古墳群・経塚』遺賀町文化財調査報告書第8集 遺賀町教育委員会
 宮小路寛宏1999 「経筒資料賞書(二)」『九州歴史資料館研究論集』24 九州歴史資料館
 三輪壽六1985 「積上式経筒試論」『日本史の黎明—八幡一郎先生福寿記念考古学論集』六興出版
 桃崎祐輔2008 「経塚と瓦からみた首羅山の歴史」『首羅山遺跡—福岡平野周縁の山岳寺院—』久山町教育委員会
 桃崎祐輔2012 「首羅山遺跡の白山神社経塚について」『首羅山遺跡発掘調査報告書』久山町文化財調査報告第16集 久山町教育委員会
 森井 啓次2008 「墨書宋人銘の書かれた経筒」『九州と東アジアの考古学—九州大学考古学研究室50周年記念論文集—』下巻 九州大学考古学研究室50周年記念論文集刊行会
 山崎純男1976 「京ノ隈遺跡」段合地所株式会社

合」に分類しており、本経筒を最後の場合に分類しているが、「李太子」を男性とする根拠については述べていない（註21）。

この「太子」には女性を示す語句が付随していない例もみられるため、男性の可能性を否定できないが、女性とみたほうが妥当であると考えられる。いずれにせよ「李太子」は日本人化に近づいた国際混血児という見方が可能であろう。

ところで、本経筒は数少ない中国人の名が記されたものとして注目される。いわゆる中国人銘経筒は、森井啓次氏や桃崎祐輔氏らによって集成されているが（註23）、本稿においても別表のとおり中国人銘経容器（本稿では福岡県福岡市京ノ隈経塚出土の外容器の蓋も含めているためこの呼称を使う）を16例、花押の可能性のある記号が記された経容器を7例確認している（表1・表2）。

妙楽寺経塚2号経塚(大分県宇佐市)の経容器の身に使われた褐釉系白磁四耳壺底部の「巖」は、求菩提山中興の祖「頼巖」との関連が指摘されている（註24）。しかし、「巖」という姓は中国でもみられるもので、『百家姓』によると、その原籍地は天水郡(甘肅省)であるという（註25）。中国人銘の可能性が高いとも考えられる。

森井氏は、底部や蓋部の墨書中国人銘のものに関しては、願主や施主を示すものではなく、福岡

市博多遺跡群で出土が顕著である墨書陶磁器と同じく、生産・流通そのものにかかわった中国人であるとしている。あわせて、積上式経筒自体が中国からの舶載品である可能性も指摘している（註26）。森井氏のいうように、積上式経筒を舶載品と考えた場合、ふたつの問題点が生じる。ひとつは、陶製経筒も同様であるが、中国での積上式経筒の出土例がみられないということ、もうひとつは、大宰府条坊跡第19次調査地点の黒灰色土層から相輪部の製作時未成品が出土していることである（註27）。

これらの問題については、積上式経筒も陶製経筒のように日本向けの専用商品として日本から注文を受け、中国で製作されたと考えることも可能であり、すべて舶載でなく一部を中国でまかっていたとだけ解釈することもできる。

また、経筒資料の鉛同位体測定をおこなった平尾良光氏は、西暦1150年頃を境として、経筒の材料が日本産から中国産へ変換した傾向がみられるとしている（註28）。また、積上式経筒については、今のところ中国産であるとの結果もでている（註29）。

しかし、平尾氏の調査成果からもわかるように積上式経筒以外のものでも中国産という結果がでていることや、他の銅製品の素材を転用した可能

表2 中国人銘の可能性のある経容器

番号	出土地	経塚遺物	年代	墨書内容	共伴遺物	立地	遺構	所在	参考文献
1	求菩提山(上宮地区第20区)(福岡県豊前市)	陶製経筒1B類(1号経筒)	12世紀	蓋裏に花押や略押の可能性のある墨書。	陶製経筒1B類1、銅製経筒1	山中	無室	国玉神社(求菩提資料館保管)	宮小路1999、桃崎2008、2012
2	求菩提山(上宮地区第20区)(福岡県豊前市)	陶製経筒1B類(2号経筒)	12世紀	底部に花押や略押の可能性のある墨書。	陶製経筒1B類1、銅製経筒1	山中	無室	国玉神社(求菩提資料館保管)	
3	伝四王寺山(福岡県糟屋郡宇美町)	陶製経筒1B類	12世紀	底部に花押や略押の可能性のある墨書。 ※奈良国立博物館と後藤直氏のものとは向きが逆になっている。安高啓明氏のご教示によると、奈良国立博物館のものが妥当とのことである。	不明	不明	不明	福岡・田中丸コレクション	奈良国立博物館1977、後藤1987
4	英彦山南岳(福岡県田川郡添田町)	積上式経筒(台座のみ)	12世紀	台座裏に墨書。※欠失部分で解説困難。	不明	不明	不明	英彦山神宮蔵	小田1979、宮小路1999
5	妙楽寺経塚2号経塚(大分県宇佐市)	経容器身(褐釉系白磁四耳壺)	12世紀	底部に「巖」墨書。※報告書では僧侶の名前と報告。	白磁碗(経容器蓋)、軒丸瓦1、平瓦1(瓦は石室の壁として使用)、木炭	寺院境内	有室	宇佐市教育委員会蔵	江藤2009
6	伝鶏足寺裏山(栃木県足利市)	経容器身(白磁四耳壺)	12世紀	底部に花押や略押の可能性のある墨書。	不明	山中	不明	足利市教育委員会蔵	足利市教育委員会2010
7	出土地不詳	陶製経筒	12世紀	底部に「口綱」の墨書。蓋は不明	不明	不明	不明	九州大学考古学研究室蔵	森井2008

(表2の参考文献)

足利市教育委員会2010 『堀りだされた足利の歴史—平成20年度足利市埋蔵文化財発掘調査パンフレット—』足利市埋蔵文化財発掘調査報告書59 足利市教育委員会
江藤和幸(編)2009 『妙楽寺経塚』市内遺跡発掘調査報告書4 宇佐市教育委員会
小田富士雄1979 『英彦山の経塚』『北九州市立歴史博物館研究紀要』1(小田富士雄1988 『九州考古学研究歴史時代各論編』小田富士雄著作集6 学生社、収録)
後藤直1987 『重要文化財 青釉経筒』『福岡市の文化財—考古資料—』福岡市教育委員会
重松敏美・宮小路賢宏・杉山洋1978 『求菩提山 第三次の調査』豊前市文化財調査報告書3 豊前市教育委員会
奈良国立博物館1977 『経塚遺宝』東京美術
宮小路賢宏1999 『経塚資料覧書(二)』『九州歴史資料館研究論集』24 九州歴史資料館
森井啓次2008 『墨書宋人銘の書かれた経筒』『九州と東アジアの考古学—九州大学考古学研究室50周年記念論文集—』下巻 九州大学考古学研究室50周年記念論文集刊行会

性もあることから一概に中国からの舶載品とは断定はできないであろう。例えば、飯沼賢司氏は、材料として銅鏡を転用した可能性を指摘している(註30)。

さらにもうひとつ考慮しておきたいことは、当時の中国の銅製品に関する時代背景である。宋代の寺鐘が、州県政の一翼を担う役割をもつようになったことを論じた金井徳幸氏によると、当時は厳しい銅禁の時代であり、仏具においても官製品あるいは、官をとおしたものでないと流通させることは許可されなかったという(註31)。このような当時の中国の国内事情をみても国外へ銅製品を流出させることは非常に厳しく、中国商人にとってもリスクの高い行為であったことが推察されるのである。

このように背景を鑑みた場合、積上式経筒については、中国からの舶載品ではなく日本製であった可能性のほうが高いものと考えられる。ただし、中国人銘銅製経筒の多くが積上式経筒であることは、中国人と積上式経筒に何らかの密接な関係性があったことを示唆している。

g. 山北経塚(糸島市山北)(表3-g)

雷山の麓から北の怡土平野へと派生する曽根丘陵の根幹部辺りの山北地区で発見されたと伝わる。発見年は不明であるが、当時の出土資料は、山北在住の井上勇氏から原田大六氏に託され志登支石墓群収蔵庫に収められたとされており、現在は伊都国歴史博物館に収蔵されている。

出土資料として、『地名表』には、「石鍋、外筒、経筒、合子、鉄剣、鉄刀」と記されている。

銅製経筒(図5-1)

いわゆる四王寺型経筒であり、蓋と筒身がくっついている状態である。法量は、総高24.8cm、推定筒身径6.7cm、底径8.5cmを測る。杉山洋氏の分類のⅢ式にあたり、その埋納時期は1120年代に比定される(註31)。底から中を覗くと、内側に経巻紙の残片が付着しているのが確認できる。底板をはめ込むつくりとなっており、ここに共伴している銅鏡がはめ込まれていたものと考えられる。

銅鏡(図5-2)

銅鏡は、直径7.2cm、厚さ0.1cmでつまみが打ち欠かされている。表面を磨かれ文様も消されてい

るが、和鏡と考えられる。鏡面を外側にむけ、底板として使用していたことが考えられ、九州で比較的多く出土する、底に銅鏡を転用した経筒の一例であるといえる(註32)。

陶製外容器(図5-3)

経筒を納入していたとみられる長胴壺がある。法量は、残存高27.8cm、底径8.7cmを測る。器形は若干歪んでおり傾いている。外面は上部外面全体に灰釉が施されるが、一部剥げており、外底部および内面は無釉となる。

口縁部は経筒を納入するためか打ち欠かされている。陶製外容器の内面は下部が膨らんでおり、経筒を容器内に納め置くと経筒蓋部が一部はみ出す形となる。このことから、これを保護する何らかの容器等を蓋として装着していたことが想定される。

青白磁合子(図5-4)

平形合子の蓋で、身は残っていない。蓋部は径5.4cm、高1.9cmを測る。側面に菊弁文を31弁廻らしている。甲の文様は不明瞭だが、七宝繫ぎ文と考えられる。所々に赤錆がつき、鉄剣や鉄刀の錆がついたものとも考えられるが、どの時点でどのような状況でついたかは定かではない。

滑石製石鍋(図5-5)

鍔付石鍋の完形品である。法量は、高さ7.1cm、口径17.4cmを測る。この石鍋は、法量から判断するに前述の陶製外容器と合わせちょうど良い大きさであり、蓋として装着されていたものと想定されている。

陶製外容器の蓋に滑石製石鍋を用いる類例としては、佐賀県鹿島市の片山第一号経塚が知られている(註33)。しかし、片山第一号経塚は、経筒が陶製四耳壺で蓋の滑石製石鍋との間に空間ができるのに対し、本例ではそのような空間はできない。長胴のため重い滑石製石鍋をのせると不安定となってしまう。そのため、この石鍋は外容器の蓋ではなかった可能性もここでは指摘しておきたい。

鉄剣

鉄剣は3片に分かれている。全体的に著しく錆びているが、残存部から両刃の剣であることがわかる。復元残存長は約58.5cmで、厚さ0.6cmを測る。なお、鉄剣を副納する同様の例としては、片山第三号経塚(佐賀県鹿島市)、座主経塚(佐賀

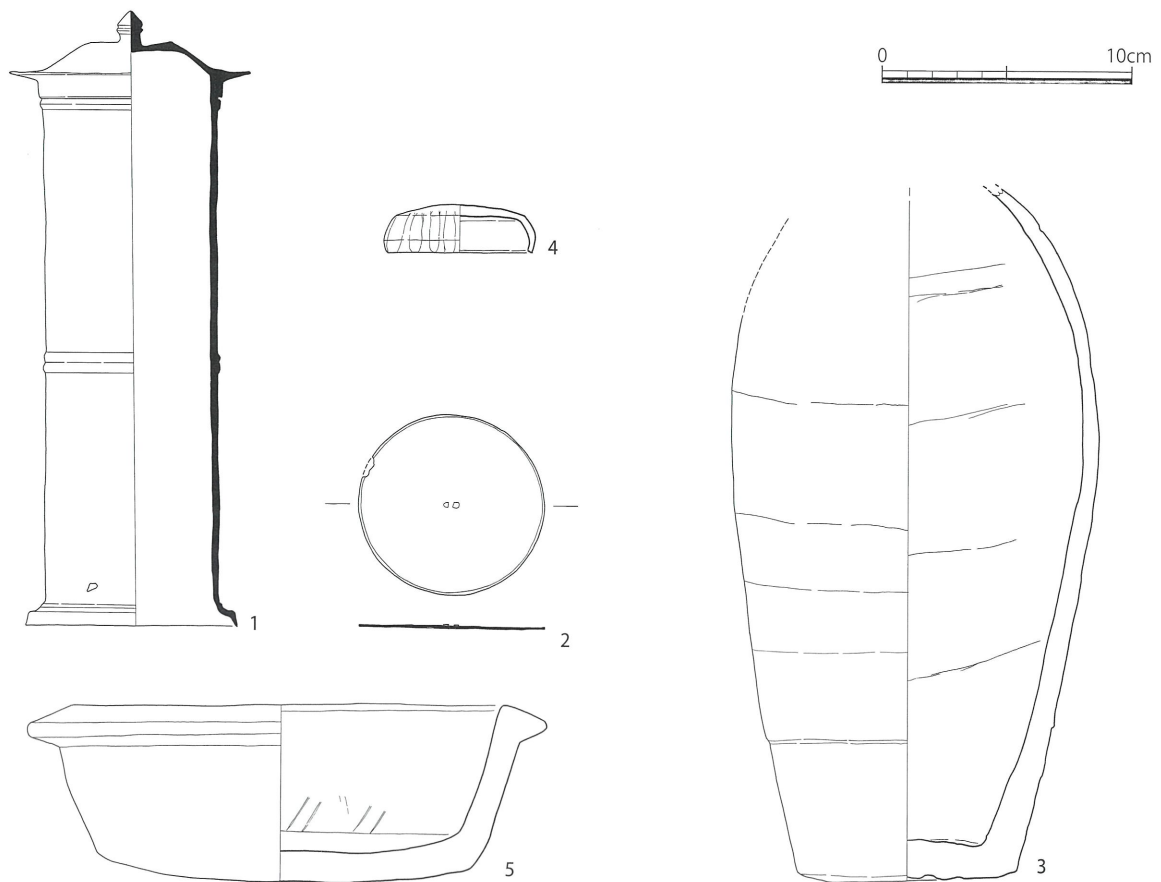


図5 山北経塚出土遺物 (1/3)

県東松浦郡浜玉町)が知られている(註34)。

鉄刀

鉄刀は6片に分かれている。全体的に錆が著しいが、刀の峰部、刃部がわかる。復元残存長は約53.8cmで峰部の厚さ0.5cmを測る。なお、鉄刀を副納する同様の例としては、片山第四号経塚(佐賀県鹿島市)(佐賀県教育庁社会教育課1970)、古園遺跡SX03経塚(佐賀県唐津市)(小松2013)が知られている。

h.伝雷山経塚(糸島市雷山)(表3-h)

雷山(標高955.3m)は脊振山系の一峰であり、その中心的な山岳寺院で、清賀上人が建立したとされる雷山千如寺が存在していた。千如寺は清賀上人にゆかりのある、通称「怡土郡七ヶ寺」の最大の寺院で往時は三百もの僧坊群が存在していたとされている。

江戸時代にまとめられた『筑前国続風土記拾遺』

の「怡土郡下」にある上宮神社の項には、「絶頂に経塚あり。野石三ツ立り」とあり、近世にはすでに経塚の存在が認識されていたことがわかる。

伝雷山経塚関連遺物としては、小田富士雄氏が記録を残した、寛治6(1092)年5月23日銘の四段積上式経筒がある(註36)。本資料は、記録された当時は福岡県教育委員会が保管していたようであるが、現在は所在不明となっている。

また、この資料とは別に現在、国立歴史民俗博物館には、詳細な出土地、出土状況について定かでないものの以下に記す伝雷山経塚遺物が現存する。

銅製経筒(図6-1)

総高29.8cmを測る銅製経筒である。蓋は円筒形の被蓋で、円筒形の刹をもち、刹は径約0.6cmで中心がやや凹んでいる。蓋は高さ5.0cm、径15.5cmの一鑄つくりとなる。筒身は高さ26.8cm、口径14.2cm、底径14.7cmを測る。

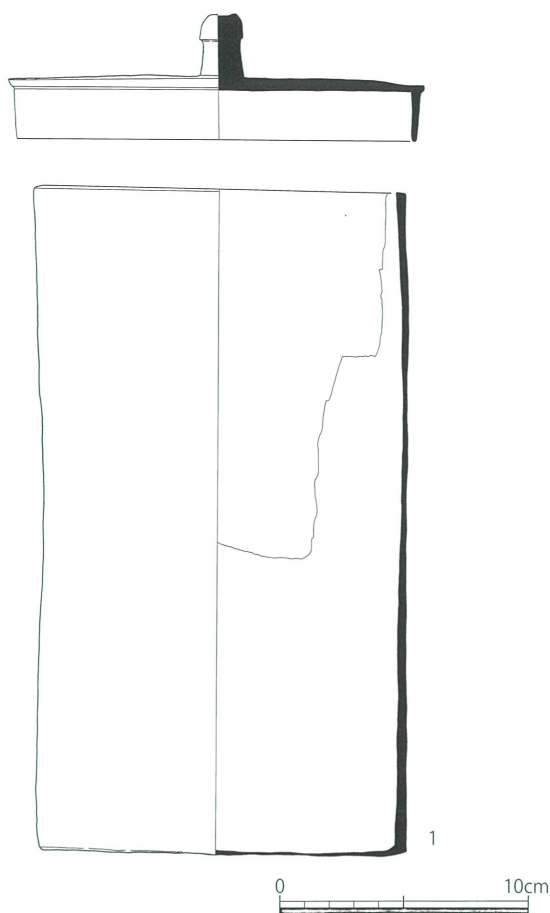


図6 伝雷山経塚出土遺物（左実測図1/3、国立歴史民俗博物館所蔵）

表面には地金が残りに、縦に調整痕がみられ、挽き板などを使用していないことがわかる。内面には溶接による補修の痕跡がみられ、そのため厚さも0.2～0.4cmと一定していない。内底面をみると、経巻跡が10巻分みられる。内底面には、金箔の痕跡もみえるが、この意味については定かではない。

また、この経筒の筒身表面には、針書き・タガネ彫り・墨書により銘文が記されている。墨書のうへに針書きしているものもあり、下書きをしていることがわかる。銘文については、後銘という可能性も否めないが、部分的に確認できたものを以下に記す。

応徳二年十月廿一日□□僧慶□
 □僧□□□□天 □大桓公
 □重□□
 藤井□清原□佛子□第一八□□什代

この銘をみると、応徳2（1085）年に僧慶□、大桓公、藤井、清原など多くの結縁によって埋納されたことがわかる。同年は、一般的に経塚が造営される時期としては比較的はやい時期にあたる。本経筒の銘文の解釈については、今後も検討する余地が残されている。

滑石製外容器（図6-2）

蓋・筒身・台座を別つくりとし組み合わせた外容器である。さらに筒身は、3部材による構成で、平面多角形をつくる。蓋は厚さ10.0cm、方形約33.0cm×34.0cmで、内径約24.0cm、深さ約2.6cmの円形の円形の内削りを施す。筒身は、高33.5cmを測る。台座は、厚さ約10.0cmの方形で約42.5cm×約38.5cmを測り、幅2.5cm～3.5cm、深さ2.0cm～2.5cmの溝を廻らす。全体的に鑿跡が明瞭に残るが、蓋・筒身・台座のそれぞれの接触面は平滑に整えられている。

h.二丈岳穴観音経塚（糸島市二丈一貴山）（表3-i）

脊振山系の西側、二丈岳（標高711m）の山頂部付近で、平成26年から翌年にかけて、九州歴史資料館と糸島市教育委員会の合同踏査が行われた。この時に未盗掘のものを含む経塚群が発見され、その一部で発掘調査が行われている。

ここでは山頂北側付近の小丘に磐座が形成されており、小丘の頂部に少なくとも5基以上の経塚の存在が確認されている。

また、「穴観音」と呼ばれる岩屋上の集石下より褐釉陶器の専用経筒が出土している。総高36.2cmの12世紀頃に中国で製作された、いわゆる砲弾形の専用陶製経筒で、外面の装飾が非常に簡素である点が特徴としてあげられる。

これと形態の似た陶製経筒として、佐賀県唐津市鏡神社経塚や神埼市背振山経塚の出土例などがあげられるが、これら出土地はおおむね背振山系の西側に限定されており、この地域に分布する特徴的な経筒群として捉えることができる。

j.小田観音堂境内経塚（福岡市西区小田塚）（表3-j）

小田観音堂は、福岡市西区小田に所在する仏堂で、博多湾の北西部、光明山と称される標高50m程度の小高い山の頂部に位置している。

『筑前国続風土記』の「志摩郡」にある小田村の項には、「村の西の山邊に、地をほれば瓷器の鼓の如くなる物出る所あり」とある。

本経塚は、昭和の初め頃に発見されたとされる（註37）が、出土状況等の詳細については、定かな記録が残っていない。出土遺物としては、陶製経筒片が出土しており（註38）、出土遺物は九州歴史資料館に保管されている。

k.小田森経塚（福岡市西区小田森）（表3-k）

『福岡市文化財分布地図』によると、福岡市西区小田の森に経塚が所在するとされる（註39）。また、高田茂廣氏によると、昭和54(1979)年ここから経筒が出土したとされる（註40）が、出土品、出土状況等の詳細については、定かな情報が残っていない。

(2)まとめ

以上のとおり、瑠璃光寺経塚を含めて現在までに確認できる、糸島地域の経塚とその関連資料の

出土状況をまとめて概観した。

これ以外にも、平家落人伝説が残る二丈唐原地区には、「黒髪塚」という積石が残る塚が祀られており、そこから出土したとされる滑石製蔵骨器が現存している。付近にも同様な積石がみられて、経塚であった可能性もある（註41）。

糸島の経塚の分布状況をみると、旧怡土郡域からが9例、旧志摩郡域からが3例となる。いずれも山稜地に所在していた寺院（またはその跡）の近接地で出土が集中しているが、築山観音堂経塚のように、平野部に築造された古墳の頂部に埋納されたとみられる事例もある。

また、開基を清賀上人とする、いわゆる怡土郡七ヶ寺や火山瑠璃光寺などのように、渡来僧に由来のある山岳寺院と経塚の出土地との共通性も指摘できる（註42）。

これらの寺院群は、いずれも玄界灘を見渡せる眺望の利く場所に立地しており、中世の寺院造営と経塚の形成、そして玄界灘の交易活動との関連性も指摘されよう。

出土経筒等の資料をみていくと、経筒については九州型の四王寺型経筒、積上式経筒のいわゆる広域型経筒の存在が確認されるが、伝雷山経塚出土遺物のような九州の型式分類に属さない、むしろ近畿や東日本に近いような感をうける経筒も確認されており、かなりバラエティに富んでいる。

その一方で、二丈岳穴観音経塚や小田観音堂境内経塚などでは、陶製経筒が出土しており、脊振山西部域に分布圏を形成した、地域色の強い経筒群がみられるのも特徴であろう。

また、飯氏経塚出土の経筒が佐賀県唐津市の古園遺跡SX03経塚出土の経筒と同工房で製作されたことが指摘されており、これもまた、糸島を含む玄界灘沿岸域または脊振山系西部域の経塚群の地域相の表れといえるかもしれない。

本稿は、糸島地域の経塚資料の紹介に終始した形となったが、経塚造営のあり方、地域間交流のあり方など様々な課題が残っており、これらについては今後の研究の発展に期待したい。

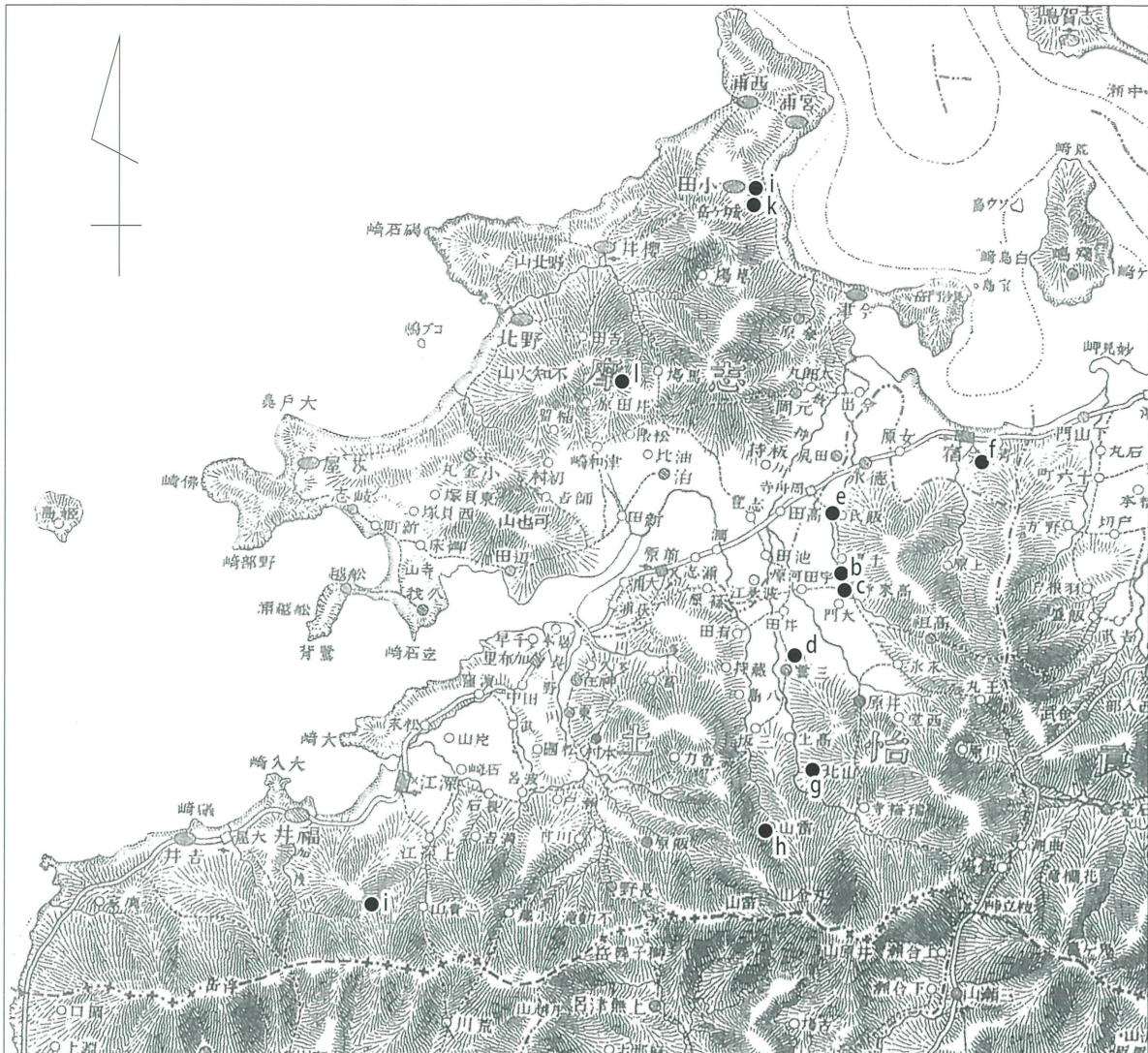


図7 糸島における経塚出土地の分布

表3 糸島の経筒一覧表

No.	記号	名称	出土地	主な出土品	備考
1	l	瑠璃光寺経塚	糸島志摩稲留字大門周辺	青銅製経筒1・陶製外容器・白磁合子(蓋1・身2)	
2	a	伝如意経塚	糸島字如意周辺	銅板製経筒1・銅製経筒 滑石製外容器1、青白磁合子1・紙本経残欠	
3	b	伝井原経塚	「福岡県糸島郡怡土村大字井原」 (現糸島市井原)	銅製経筒(横上式)1	
4	c	伝大門経塚	糸島字大門周辺	銅製経筒(横上式)1、銅鏡1、刀子1	
5	d	築山古墳経塚	糸島市	陶製経筒片、青白磁合子(蓋)1点	桃崎2012
6	e	伝飯氏経塚	福岡市西区飯氏	銅製経筒1、土製外容器2点(1組)	
7	f	伝今宿経塚	「福岡県糸島郡今宿村今宿」 (現福岡市西区今宿)	銅製経筒(横上式)1、銅鏡1、刀子1	
8	g	伝山北経塚	糸島市山北	銅製経筒(横上式)1、陶製外容器1、 滑石製石鍋1、青白磁合子1、鉄剣1、鉄刀1	
9	h	伝雷山経塚	糸島市大字雷山	銅製経筒1、滑石製外容器1組	
10	i	二丈岳磐座上経塚 二丈岳穴観音経塚	糸島市二丈一貴山	褐釉陶器片、青白磁合子片、陶製片口片、白磁片など 陶製経筒1組、土師皿など	資料表採のみ 5墓以上
11	j	伝小田観音堂境内経塚	福岡市西区小田塚	陶製経筒片1	
12	k	伝小田森経塚	福岡市西区小田森	不明	

〈註〉

- (1)岡寺良ほか編「背振山の山岳信仰の研究」
2017 九州歴史資料館
- (2)本稿Ⅲ章以降は、阿部洪太郎氏が本稿用にまとめた糸島地域の経塚資料の集成及び所見に、河合が加筆・修正し、まとめなおしたものである。Ⅳ章の遺物実測図については阿部氏が原図を作成したものに河合が加筆・修正を加え掲載した。
- (3)当該出土遺物は、平成21年2月20日付志教社第703号で遺跡発見届、同年3月26日付で埋蔵文化財保管証を関係機関へ提出している。
- (4)志摩町史編纂時調査資料から抜粋
- (5)小田富士雄1970「九州の経塚」『佛教藝術』76 毎日新聞社
- (6)前原町教育委員会編1972『前原町文化財地名表』前原町教育委員会
- (7)宮小路賀宏1999「経塚資料覚書(二)」『九州歴史資料館研究論集』24 九州歴史資料館
- (8)桃崎祐輔2012「築山観音堂」『第2回九州山岳霊場遺跡研究会「脊振山系の山岳霊場遺跡—脊振山・雷山・怡土七ヶ寺—」資料集』九州山岳霊場遺跡研究会
- (9)杉山富雄1996『兜塚古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第474集 福岡市教育委員会
- (10)周船寺村誌編纂委員会1961『周船寺村誌』周船寺村役場
- (11)小松譲(編)2013『古園遺跡・千々賀遺跡・千田島Ⅱ遺跡—西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書(14)—』佐賀県文化財調査報告書第200集 佐賀県教育委員会
- (12)奈良国立博物館1991『奈良国立博物館蔵品図版目録考古篇経塚遺物』奈良国立博物館
- (13)竹岡勝也1934「西油山天福寺址」『福岡縣史蹟名勝天然記念物調査報告』9 福岡縣
- (14)小田富士雄1980「出光美術館所蔵の九州発見経筒」『出光美術館館報』32 出光美術館
- (15)註(13)に同じ
- (16)桃崎祐輔2008「経塚と瓦からみた首羅山の歴史」『首羅山遺跡—福岡平野周縁の山岳寺院—』久山町教育委員会
- (17)大庭康時2012「中世における福岡平野周縁の山岳寺院と博多」『首羅山遺跡発掘調査報告書』久山町文化財調査報告書16 久山町教育委員

会

- (18)註(5)に同じ
- (19)註(15)に同じ
- (20)服部英雄2006「博多の海の暗黙知・唐房の消長と在日本人のアイデンティティ」『内陸圏・海域圏交流ネットワークとイスラーム』權歌書房
- (21)山川公見子2006「女性と埋経」『考古学の諸相Ⅱ』坂詰秀一先生古稀記念論文集 匠出版
- (22)森井 啓次2008「墨書宋人銘の書かれた経筒」『九州と東アジアの考古学—九州大学考古学研究室50周年記念論文集—』下 九州大学考古学研究室50周年記念論文集刊行会
- 桃崎祐輔2008「経塚と瓦からみた首羅山の歴史」『首羅山遺跡—福岡平野周縁の山岳寺院—』久山町教育委員会
- (23)江藤和幸(編)2009『妙楽寺経塚』市内遺跡発掘調査報告書4 宇佐市教育委員会
- (24)林徳貞2002『百家姓』新疆青少年出版社
- (25)註(21)に同じ
- (26)狭川真一1984「第Ⅱ章13その他の遺物」『大宰府条坊跡Ⅲ』太宰府市の文化財8 古都大宰府を守る会
- (27)平尾良光2008「材料が語る中世—鉛同位体比測定から見た経筒—」『経筒が語る中世の世界』別府大学文化財研究所企画シリーズ① 思文閣出版
- (28)石川ゆかり・平尾良光2008「九州出土経筒の鉛同位体比が語るもの」『経筒が語る中世の世界』別府大学文化財研究所企画シリーズ① 思文閣出版
- (29)飯沼賢司2008「銭は銅材料となるのか—古代～中世の銅生産・流通・信仰—」『経筒が語る中世の世界』別府大学文化財研究所企画シリーズ① 思文閣出版
- (30)金井徳幸2010「宋代の寺鐘—時報と銅禁をめぐって—」『立正史学』108 立正大学史学会
- (31)杉山洋1985「四王寺型経筒—村上経塚出土遺物の紹介—」『MUSEUM』413 東京国立博物館
- (32)村木二郎2003「経塚に埋納された鏡」『鏡にうつしだされた東アジアと日本』21世紀を拓く考古学① ミネルヴァ書房
- (33)佐賀県教育庁社会教育課編1970『佐賀県の経

筒』佐賀県教育委員会

(34)註(32)に同じ

(35)小田富士雄1970「九州の経塚」『佛教藝術』

76 毎日新聞社

小田富士雄・宮小路賀宏1970『武蔵寺経塚』

武蔵寺史編纂会

(36)註(5)に同じ

(37)高田茂廣1980「北崎の歴史」『北崎小学校百

年誌』福岡市立北崎小学校

(38)井形進2012「万歳山光明寺と平安時代後期の

仏像群」『第2回九州山岳霊場遺跡研究会「脊

振山系の山岳霊場遺跡—脊振山・雷山・怡土

七ヶ寺—」資料集』九州山岳霊場遺跡研究会

(39)福岡市教育委員会編1995『福岡市文化財分布

地図(西部II)』福岡市教育委員会

(40)註(37)に同じ

(41)岡部裕俊・古川秀幸2012『糸島平家物語—糸

島地方における武士の出現と平家落人伝説—』

糸島の歴史解説図録1 糸島市立伊都国歴史

博物館

(42)吉田扶希子2003「雷山千如寺に関する一考察」

『西南学院大学大学院文学研究論集』22 西

南学院大学大学院

福岡県立糸島高等学校 郷土博物館所蔵資料紹介

米倉 法子（伊都国歴史博物館）

I はじめに

高校付属の施設として唯一「博物館相当施設」の指定を受けている「糸島高校郷土博物館」には、原田大六氏をはじめとする歴代の関係者によって、多くの貴重な遺物が収集・保管されている。その一部は2016年発行の『福岡県立糸島高等学校郷土博物館公式ガイドブック』で紹介されているが、実測図等の詳細は記載されていない。

1997年に前原市立伊都歴史資料館の企画展「再見！糸島の博物館」を開催した折に糸島高校郷土博物館より古墳時代の収蔵遺物数点を借用し、資料調査を行う機会を得た。その時の実測図が未発表となっていたため、今回この紙面を借りて報告することとする。眠っている資料を公開することによって、僅かでも今後の研究の一助になればと願う。

社会体制の大変革期ともいわれる古墳時代。糸島地方では現在まで、この古墳時代を象徴する前方後円墳が60基以上発見されている。糸島の前方後円墳は古墳時代前期のものが多く、しかも大形である。このことは、伊都国と初期の大和政権との密接な関係と伊都国の北部九州地域における盟首的な地位が弥生時代に続いて保たれていたことを意味し、同校博物館には当時の繁栄を示す銅鏡、石製宝器類、埴輪などに加え一貴山銚子塚古墳の石室の石材、木棺材、水銀朱、人骨片などが収められている。

古墳時代の後半期には、糸島地方だけでも総数千基とも言われる多くの横穴式石室の古墳が造られている。多くは群集墳の規模も小さく、開墾などで石室が露出したことで正式な調査を待たずに遺物が掘り出されることも多々あり、博物館の収蔵品の中にもこのような古墳に副葬されていたと思われる須恵器等が多くある。今回紹介する遺物も出土地が注記されているにとどまるものである。他地域から持ち込まれたものである可能性もあるが、当該博物館の古墳時代資料に限って概観すると、ほぼ糸島地方で採集、出土したもので

構成されていることから、無記載の資料も糸島地方出土のものである可能性が高く、資料的価値においては注目に値するものが多い。

II 資料

今回紹介する資料は石枕1点、鉄刀および刀装具6点、陶質土器・須恵器8点である。

1 武具

刀身1点・鏢3点・切羽1点・柄頭1点があるが、このうち鏢1点・切羽・柄頭は鍍金装で、刀身とセットと考えられる。

<鍍金装小刀>

糸島市志摩久米に所在する社古田^{しゃこた}1号墳出土と伝わる。同古墳は円墳とされ、資料4点は石室から出土したとされているが、詳細な出土状況はわからない。

・刀身（第2図-1、巻頭図版4）

小型の鉄刀で、全体に錆がひどく朽ちかけている。残存長18.5cm、身幅2.7cm前後、厚さ0.7cm前後、茎幅1.2～2.0cm前後、厚さ0.5cmを測る。茎には目釘孔と思われる箇所が2カ所あり、随所に木片が遺存している。

・鏢（第2図-2、巻頭図版4）

長径5.9cm、短径4.6cm、厚さ0.3cmを測る。鉄製の地金に鍍金を施したものである。鍍金は表裏2面の他に外側面部にも施されている。

・切羽（第2図-3、巻頭図版4）

長径4.9cm、短径3.0cm、厚0.25cm。表裏2面に鍍金が施されている。片方の面には、若干ではあるが黒漆らしきものの遺存がみられる。

・柄頭（第2図-4、巻頭図版4）

厚さ1mmほどの鉄板が全体として握り拳のような形状を呈したもので、柄頭の一部と思われる。全体の長さが5cm前後、幅2cm前後に復元できる。外面に鍍金を施し、ほぼ全面遺存しているが、一部赤錆が浮き出ている。いわゆる頭椎刀の柄頭と考えられる。

<鐔> (第2図-5・6、巻頭図版4)

鉄製で、推定長径8.0cm、推定短径7.0cm、厚さ1.7cm (5) と推定長径7.0cm、推定短径5.8cm、厚さ0.8cm (6) の計2点である。どちらも錆がひどい。出土地は不明である。

2 土器・陶器

<統一新羅系陶質土器>

蓋1点と高坏2点がある。

・蓋 (出土地不明) (第3図-1、巻頭図版4)

口径13.0cm、器高5.8cm、外面は暗灰色、内面は青灰色で、外面に自然釉が疎らにかかる。蓋の天井部にはつまみの周囲に印文とコンパス文類似の文様をめぐらす。内側は水滴形の印文14カ所、外側は円文に重なるように描いた、半円2個と点によるコンパス文類似の文様で、21カ所である。半円2個は右半→左半の順に描かれている。

・高坏 (出土地不明) (第3図-2、巻頭図版4)

口径13.1cm、底径7.5cm、器高6.4cm、色調は暗灰色で口縁と脚部の周縁は青灰色を呈する。第2図-1の蓋とセットと思われる。

・高坏 (出土地不明) (第3図-3、巻頭図版4)

口径11.0cm、底径5.8cm、器高6.4cm、色調は灰青色、脚部は暗灰色で坏部内底と脚部外面に濃緑色の自然釉がかかる。脚部に2カ所の方形スカシがある。

<百済系陶質土器>

・瓶形土器 (第3図-4、巻頭図版4)

糸島市加布里城山出土とされる。加布里城は現在の加布里行政区の南にそびえる標高123.4mの城山^{じょうやま}を中心に築かれた中世山城で、この尾根筋や山腹から横穴式石室墳が数基確認されており、その一基から出土したものかも知れない。口径5.4cm、器高8.6cm、色調は青灰色。焼成は良好、胎土は精良で1.0mm以下の白色砂粒が若干混じる。胴部には線刻による文様があり、ヨットを描いたようなその文様は中央縦線→左縦線→右縦線→横線の順に描かれている。第3図-5の流れを組むものと考えられる。

・瓶形土器 (出土地不明) (第3図-5、巻頭図版4)

口径4.4cm、底径7.7cm、器高12.1cm、色調は全体的に赤褐色で、色ムラがある。焼成は良好で胎土に1.0～2.0mmの白色砂粒を少量含む。底部はケズリの後ナデ調整を施す。その形状から百済の系譜をひく土器と考えられる。

<須恵器>

糸島市長野出土とされる須恵器が3点ある。昭和49年刊行の『前原町文化財地名表』には長野1号墳から須恵器と土師器が出土し、糸島高校が所蔵する旨の記載がある。博物館には他に「長野」出土の記載がある土器はないため、これらの土器がこの古墳から出土した可能性が高い。『地名表』に付された『地図』にマークされた地点付近(長野1199番地)には、現在でも花崗岩の転石が畑の傍らに積み上げられており、この地に横穴式石室墳が築かれていたことをうかがわせる。

・蓋 (第3図-6、巻頭図版4)

口径13.5cm、器高2.8cm。色調は青灰色。焼成良好で、胎土に1.0～2.0mmの白色砂粒を含む。天井部付近に粘土クズが付着している。国産須恵器と思われる。

・高台付坏 (第3図-7、巻頭図版4)

口径15.3cm、高台径10.0cm、器高6.4cm。色調は青灰色。焼成良好、胎土に0.5～2.0mmの白色砂粒を含む。底部付近はヘラケズリ痕を残す。国産須恵器と思われる。

・人物線刻長頸壺 (第3図-8、巻頭図版4) ①

高さ19.9cm、胴部最大径15.8cm、口径8.7cm。底部から肩部にかけては直線的で肩部に明瞭な稜を形成し、内傾して頸部にいたる。頸部は中ほどから口縁部にかけてラップ状に開き、口唇部では断面が平坦面を有す。外面底部はヘラ切り後ナデ、胴下半部で手持ちヘラケズリ仕上げが行われる他は横ナデで仕上げている。人面は壺の肩部に縦3.8cm、横6.5cmに線刻されている。右斜め前方から描いており、頭部の輪郭を円状に一筆で描き、顔は目、鼻、口を書き込むが、口は鼻下で考錯している。古代人物画では、斜め方向からの描写は珍しく、希少な資料であろう。

3 石枕 (第3図-9、巻頭図版4)

糸島市篠原にある前原中学校東側の丘陵上の箱式石棺で出土したと伝わる。『前原町文化財地図』では、現在の前原中学校正門の北東160mの丘陵頂部に出土地が表示されている。石枕は阿蘇溶結凝灰岩製で、長さ17.6cm、厚さ6.9cm、重さ2.7kgを測る。人の頭ほどの石塊を半裁し、研磨により平坦加工し、頭部を乗せる部分を窪ませている。窪みの周囲は縁取りするように一段高く削り出している。

同校博物館には、佐賀県境にある長須隈古墳から出土した舟形石棺があるが、この石棺の石材は、比較的近隣で取れる松浦砂岩を利用しており、本資料とは異なっている^②。

III おわりに

今回紹介した資料は、詳細な出土地点や出土状況が明らかではないため、一次資料とは言えないものの、いずれも糸島地域の古墳時代を考える上での特徴を有している。

鍍金装の小刀はいわゆる頭椎刀と考えられる。頭椎刀は、6世紀後半から7世紀初頭頃、地域の首長墓から出土する。同時期前後の糸島地域では、福岡市西区元岡古墳群で圭頭大刀・文字象嵌入り大刀が出土している^③。古墳時代終末期の糸島を考える上で、本資料も重要な一例と言えよう。

統一新羅時代の陶質土器は完形で出土すること自体がまれであり、百済系土器とともに墳墓の出土であろうか。

単体で作られた石枕は極めて珍しい。古墳時代九州において、石枕は4世紀代後半から出現する。熊本県向野田古墳^④の石枕は舟形石棺に伴うものであり、同古墳からは竪穴式石室控積内の屑石に混じって石枕未成品1個も検出されている。唐津市谷口古墳では、長持形石棺の床面に作り出している^⑤。5世紀代中頃以降になると肥後を中心に発達する横穴墓や横穴式石室内の石屋形内において石枕が作り出され、これらの横穴墓や石室には往々にして装飾が施されており、これらは組み合わせとして中北部九州一円に拡がっていくが、い

ずれも作り出しの石枕がほとんどである。

単体の石枕としては、熊本県氷川町竜北高塚古墳出土品^⑥、岡山県新庄天神山古墳出土品^⑦があるが、いずれも長方形にきれいに面取りをしている。

本資料は阿蘇溶結凝灰岩製であることが大きな特徴である。上述の通り、5世紀代になると、肥後の古墳文化が様々な形で北部九州や広く畿内まで伝播していく。三重県おじよか古墳^⑧は肥後型に似た石室を有するとともに、竜北高塚古墳と同様に直弧文を有した埴製枕が出土している。

6世紀代には福岡の石屋形などにも阿蘇溶結凝灰岩が使われているが、前期古墳において同石材を使用したものは未だ報告されていない。前述の谷口古墳・長須隈古墳の石材は地元産出の砂岩を使用している。

当資料は、箱式石棺から出土したと伝わる。箱式石棺は5世紀後半以降、急速に減少する傾向を示しており、下限を古墳時代中期に置くことが可能である。

以上の点を勘案すれば、当石枕は古墳時代中期に属する可能性が高く、肥後地域と何らかの接触があった首長層の墓と考えることが妥当であろう。5世紀代の横穴式石室である曾根狐塚古墳、井原南田古墳、西堂四反田1号墳、引ヶ浦古墳などでは床面に仕切石を並べて死床を設けており、肥後型石室との関連がうかがわれる。このことから糸島地域と肥後地域とは文化的つながりがあったといえよう。

表1 肥後南部の石枕を伴う石棺一覧表

番号	石棺・古墳名	出土地	棺種	石材種別
1	高塚古墳	八代市竜北町大字高塚	円墳・冢形石棺	第6期阿蘇溶結凝灰岩
2	上北山王古墳	八代市竜北町大字野津	舟形石棺	
3	室ノ山二号石棺	八代市宮原町大字今	舟形石棺	第7期阿蘇溶結凝灰岩
4	大王山三号墳	八代市宮原町大字早尾	円墳・舟形石棺	第6期阿蘇溶結凝灰岩
5	高城山三号墳	熊本市小島町	円墳・舟形石棺	第8期阿蘇溶結凝灰岩
6	向野田古墳	宇土市松山町	前方後円墳・竪穴式石室・舟形石棺	第6期阿蘇溶結凝灰岩
7	鴨籠古墳	宇土郡不知火町長崎	円墳・竪穴式石室・冢形石棺	第8期阿蘇溶結凝灰岩
8	吉野山山頂石棺	下益城郡城南町杉上	舟形石棺	阿蘇溶結凝灰岩

※高木恭二1981・1982・1983を参考に作成



第1図 前原町文化財地図（前原町文化財地名表付図）に加筆（1/25,000）
34：篠原箱式石棺（野線枠のなか）

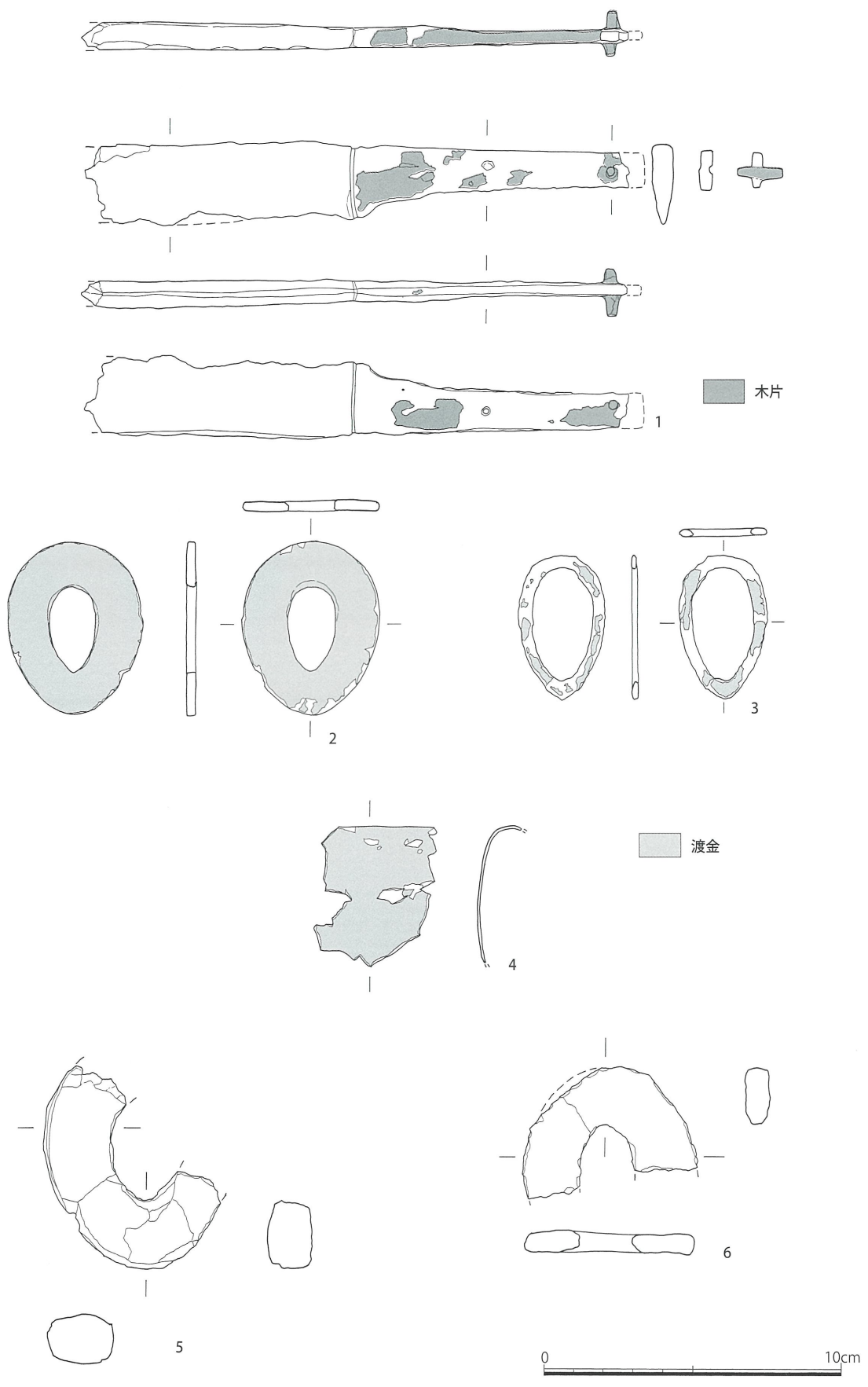
<註>

- ① 岡部裕俊・牟田華代子・比佐陽一郎・片多雅樹 2001 「飯原門口遺跡」前原市文化財調査報告書第72集
- ② 原田大六 1969 「邪馬台国のナゾにいどむ 伊都国王墓展」夕刊フクニチ・平原遺跡調査団
岡部裕俊・米倉法子 1997 「再見！糸高の博物館part1 古墳時代編」『糸高高校郷土博物館収蔵品展』前原市立伊都歴史資料館
岡部裕俊・堀本一繁・神野晋作 2016 「福岡県立糸島高等学校郷土博物館 公式ガイドブック」福岡県立糸島高等学校
- ③ 大塚紀宜 2017 「元岡・桑原遺跡群22」福岡市埋蔵文化財調査報告書1210集
- ④ 富樫卯三郎 1968 「向野田古墳」宇土市埋蔵文化財調査報告書第二集による。
- ⑤・⑦ 倉敷考古館「蔵の内外よもやまばなし（111）石枕」www.kurashikikoukan.com/yomoyama/2011/111.html
- ⑥ 高木恭二（高木1983）による。
- ⑧ 三重県文化財データベース「おじょか古墳」

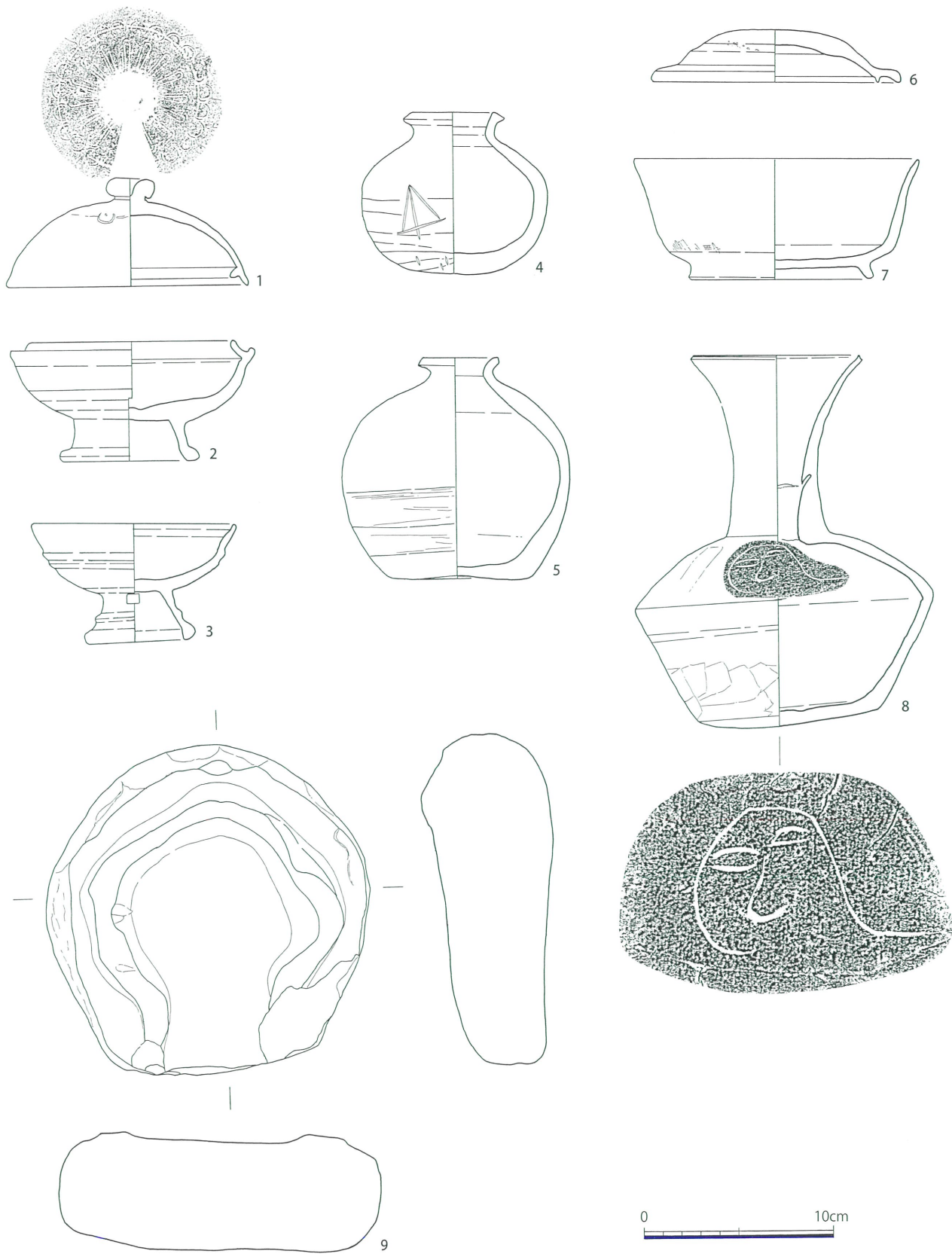
www.bunka.pref.mie.lg.jp/Miebunka/mobile/bunkazaiMobil/730977

<参考文献>

- 高木恭二 1981 「肥後南部の石棺資料（一）」『宇土市史研究』第二号 宇土市教育委員会・宇土市史研究会
高木恭二 1982 「肥後南部の石棺資料（二）」『宇土市史研究』第三号 宇土市教育委員会・宇土市史研究会
高木恭二 1983 「肥後南部の石棺資料（三）」『宇土市史研究』第四号 宇土市教育委員会・宇土市史研究会
原田大六・大神邦博 1974 「前原町文化財地名表」前原町教育委員会



第2図 武器実測図 (1/2)



第3图 土器・石枕実測図 (1/3)

【資料紹介】

伊都国歴史博物館所蔵の弥生～古墳時代木器

—池田中上町・大五郎遺跡、本田孝田遺跡出土木器—

岡部 裕俊（伊都国歴史博物館）

1. はじめに

近年、糸島地方では、低湿地における発掘調査事例が増加し、これとともに縄文～中世・戦国期にかけての木器の出土事例も増加傾向にある。現在、筆者が把握しているだけでも32箇所（第1図、表①）に及び、多くの遺跡で多様な木器の出土が報告されている。

従来は、生活用具の出土例が中心であったが、近年では、元岡・桑原遺跡（福岡市西区）で製鉄関連遺構群が発見されたことに伴い、近隣で木簡が出土し（註1）、また、近接する泊桂木遺跡でも7～8世紀の木簡が出土する（註2）など、文字史料も絡めて学術研究上の新たな課題を投げかけた貴重な資料も発見されている。

なかでも、弥生時代～古墳時代にかけての遺跡では、土器溜りなどから大量の有機質遺物が出土することも少なくなく、上籴子遺跡（糸島市）（註3）、今宿五郎江遺跡（註4）、元岡・桑原遺跡（註5）（以上福岡市）などでは、弥生時代中期後半～後期にかけての木器が多量に出土し、当該期における生活実態を解明する上で貴重な情報を提供しており、今後の調査・研究の進展も期待されているところである。

さて、伊都国歴史博物館では、糸島市内の発掘調査で出土した資料のうち、保存処理が完了した木製品を順次、収納保管しており、平成27年度末までに収納した木製品の数は約2,000点にのぼる。

このなかには、発掘調査報告書の作成時に諸般の事情で報告に漏れた資料なども存在するため、これら資料の報告・周知化の取り組みは、博物館に委ねられることになる。

本項では、博物館で新たに収納した資料のうち、弥生時代～古墳時代の木器が出土した池田中上町遺跡、池田大五郎遺跡、本田孝田遺跡の出土木器を紹介し、資料公開の責務を果たすとともに、併せて、これらが出土した遺跡の性格などについて

も若干の検討を加えてみたい。

なお、報告文中に示した木器の樹種については、筆者の推定に留まることをお断りしておく。

また、今回紹介する資料のうち、本田孝田遺跡出土資料7、8以外は全て、平成16～19年度に本市教育部文化課文化財係の脇谷華代子（旧姓牟田・平成15～17年度）、三嶋直子（旧姓檜崎・平成18～19年度）両氏が中心となり、本市の直営で処理を実施したPEG含浸処理によるものである。両氏の献身的な取り組みによって腐朽の危機にあった多くの木器の保存が達成されたことを記して、感謝の意を表したい。

2. 遺跡と出土木器

（1）池田中上町遺跡

遺跡の概況

糸島市大字池田字中上町一帯に所在する遺跡で、瑞梅寺川右岸の標高12mほどの沖積微高地上に立地する。この遺跡は、福岡市との市境に位置しており、調査地点の東隣には縄文後期～弥生前期の遺構や遺物が出土した千里遺跡も立地している（註6）、本来は、市境をまたいで池田中上町遺跡と同一の集落遺跡と考えられる。

発掘調査は、国道202号線バイパス建設工事に伴い1990（平成2）年に実施され、概要報告書が刊行されており（註7）、土坑、溝、柱穴、自然流路などが検出されている。

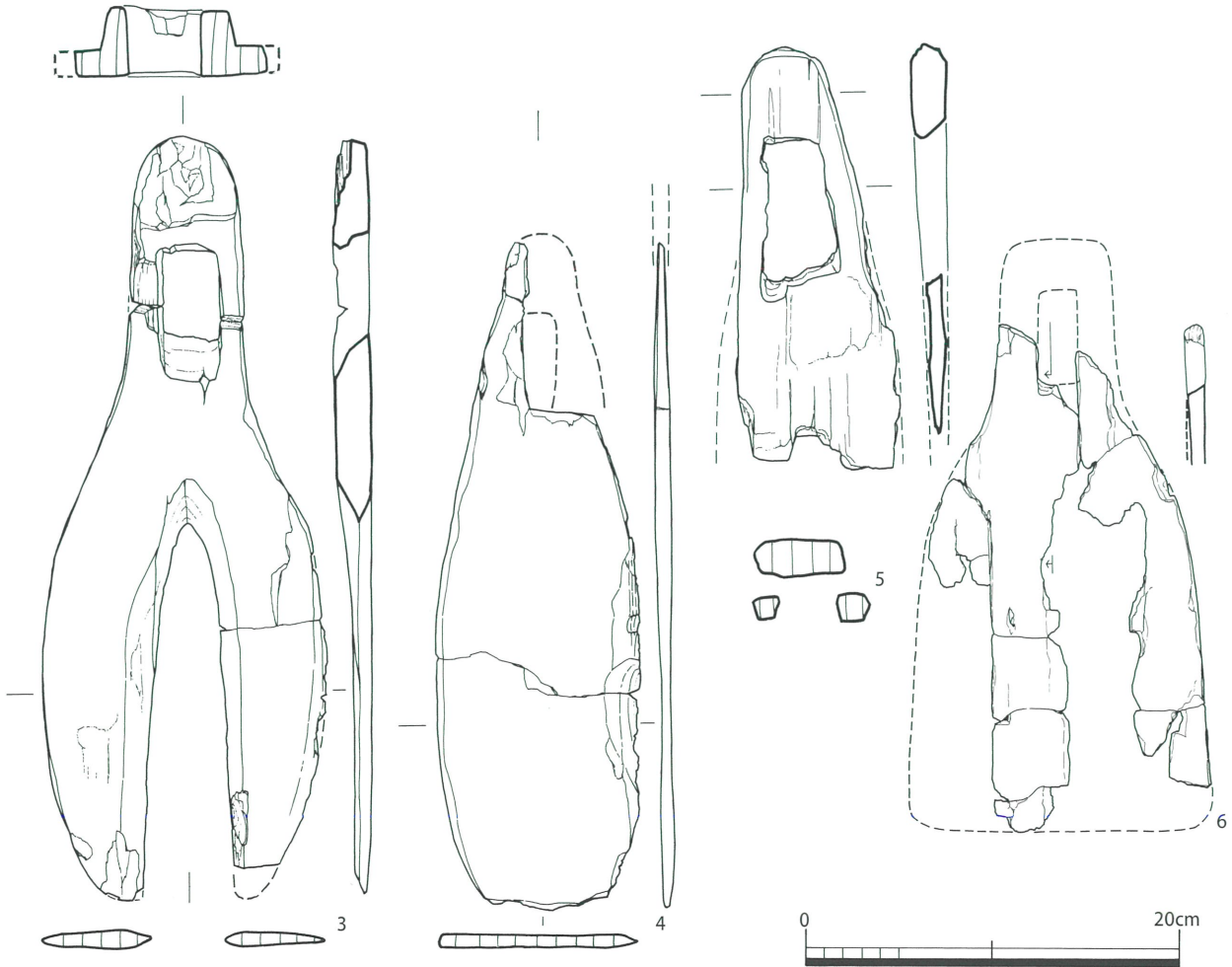
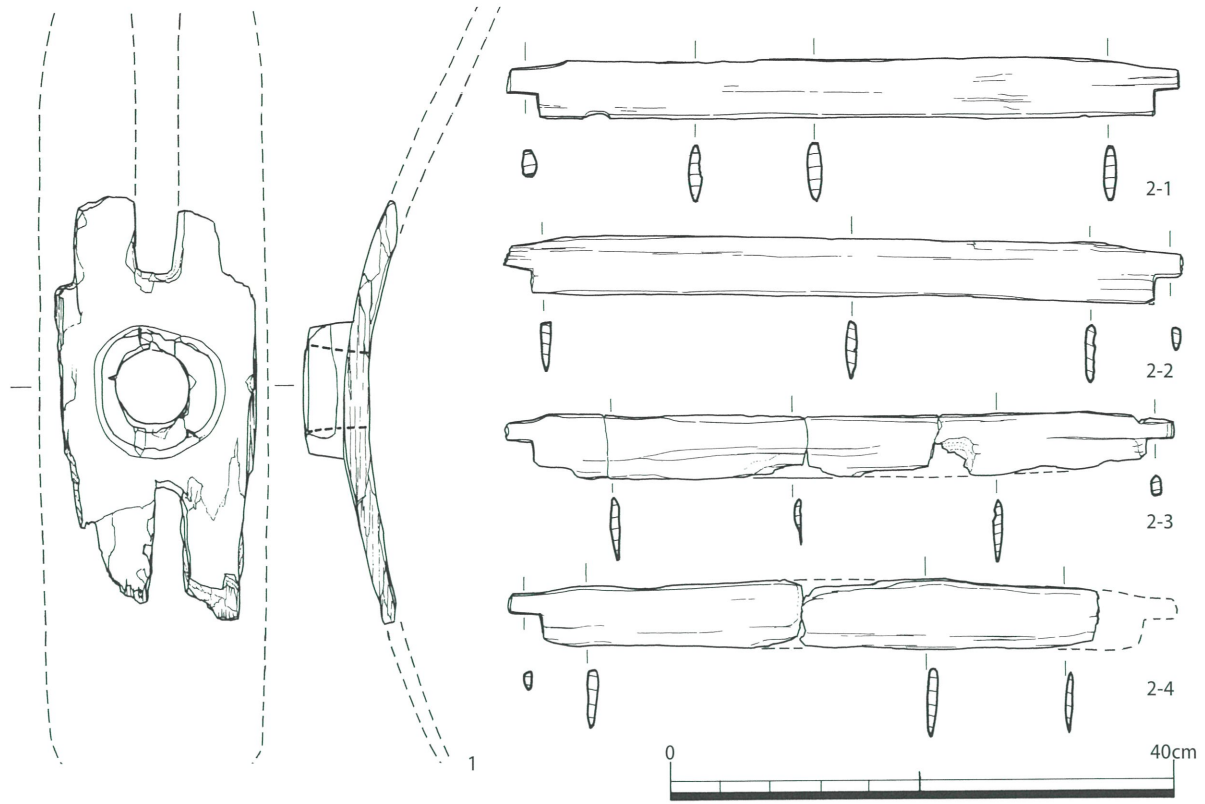
特に、二本の自然流路（図版1-1）から、多量の流木とともに突帯文～板付Ⅰ式期の深鉢、浅鉢、甕、壺などの土器が出土した。他に石器、木器なども出土しておりその一つが諸手鋏であるが、これら遺物の時期も概ね出土土器の時期に収まるものと考えられる。



第1図 糸島地方における主な木器出土遺跡の分布

番号	遺跡名	時代	主な木器	備考
1	深江井牟田遺跡	弥生	椀 杓子 脚付盤 建築材	
2	深江中道遺跡	弥生早～前期	丸底ジョッキ形容器 板製品	竪穴状遺構
3	上深江小西遺跡	弥生	建物柱根	
4	石崎曲り田遺跡	奈良	井戸枠	
5	石崎大坪遺跡	弥生	矢板 平鍬、又鍬 矢板、井削 高床建物扉板	
6	石崎矢風遺跡		箱形容器 紡錘車、容器把手 他	水口 井堰
7	本田孝田遺跡	弥生後期	農具、食事具	
8	飯原門口遺跡	弥生	三又鍬片	弥生後期包含層 未報告
9	東下田遺跡	15～16世紀	舟形 漆塗り椀 鹿角他	未報告
10	釜塚古墳	古墳中期	石見形木製品 用途不明薄板	
11	荻浦坂の下遺跡	14世紀	大柱	
12	上糴子遺跡	弥生・古墳	農具 工具 運搬具 食事具 建築材 祭祀具	
13	篠原東遺跡群	12～15世紀	組合せ式木棺、木簡、漆器、曲げ物、竹籠、他	
14	潤寺丁田遺跡	古墳前期	脚付盤(脚部片とも) 杭 他	SD01
15	潤地頭給遺跡	弥生	農具、準備造船 他	
16	潤古屋敷遺跡	古墳 鎌倉	農具 梯子 下駄 桶 他	
17	潤番田遺跡	鎌倉～戦国	箸 下駄 桶 井戸枠 他	
18	井原丁ノ坪遺跡	古墳後期	袋状鉄斧柄 柱材 杭	
19	波多江遺跡	戦国時代	下駄 曲げ物 他	
20	池田井田遺跡	15世紀	建物柱根	
21	池田大五郎遺跡	古墳	農具	
22	池田中上町遺跡	弥生前期	諸手鍬	
23	高田チク遺跡	弥生前期	刻み椀子部材 柄	
24	高田遺跡群	弥生中期以降	又鍬、鍬柄 用途不明品 他	
25	怡土城跡	奈良～平安	下駄	濠
26	志登遺跡	鎌倉	漆器碗 櫛 紡錘車	
27	泊リュウサキ遺跡	奈良	井桁、木簡4枚、曲物底板他	井戸
28	一の町遺跡	弥生中期	拓摺、斧柄、又鍬 容器 柱 礎板	
29	元岡・桑原遺跡群	弥生中期～後期	農具 工具 運搬具 食事具 建築材 祭祀具	
30	今宿五郎江遺跡	弥生	農具 工具 運搬具 食事具 建築材 祭祀具	
31	谷遺跡	弥生後期	鍬、鍬柄、アカトリ、杓子、ヤス、容器、建築部材他	
32	大塚遺跡	中世	小刀鞘 他	
文献(番号は、遺跡地名表の番号に対応)				
1	古川秀幸 『深江井牟田遺跡』 1994 二丈町教育委員会			
2-1	津國豊 『深江・中道遺跡』 1999 二丈町教育委員会			
2-2	古川秀幸 『中道遺跡2』 2008 二丈町教育委員会			
3	村上敦 『上深江・小西遺跡』 1998 二丈町教育委員会			
4	古川秀幸 『石崎曲り田遺跡』 2005 二丈町教育委員会			
5-1	橋口達也 『石崎大坪遺跡1』 1995 二丈町教育委員会			
5-2	古川秀幸 『大坪遺跡2』 1995 二丈町教育委員会			
6-1	古川秀幸 『石崎矢風遺跡2』 1997 二丈町教育委員会			
6-2	古川秀幸 『石崎矢風遺跡』 2010 糸島市教育委員会			
7	角浩行 『本田孝田遺跡・東又ス町遺跡』 1993 前原町教育委員会			
10	岡部裕俊 『釜塚古墳』 2003 前原市教育委員会			
11	岡部裕俊 『荻浦集落・祭祀・生産遺構編』 2008 前原市教育委員会			
12	野田純子 『上糴子遺跡みえてきた伊都国人の暮らし』 1995 前原市教育委員会			
13-1	江野道和 『篠原東遺跡群1』 2017 糸島市岐養育委員会			
13-2	江野道和 『篠原東遺跡群2』 2018 糸島市岐養育委員会			
14	瓜生秀文 『潤寺丁田遺跡』 1992 前原町教育委員会			
16-1	瓜生秀文 『潤遺跡群3』 2013 糸島市教育委員会			
16-2	岡部裕俊 『潤古屋敷遺跡の古墳時代木器について』 『伊都国歴史博物館紀要12』 2017 伊都国歴史博物館			
17	平尾和久 『潤遺跡群2』 2012 糸島市教育委員会			
18	岡部裕俊 『井原丁ノ坪遺跡』 1991 前原町教育委員会			
19	橋口達也 『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』 1982 福岡県教育委員会			
20	脇谷華代子 『池田井田遺跡』 2006 前原市教育委員会			
21,22	角浩行 『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査概報』 1991 前原町教育委員会			
23	岡部裕俊 『高田遺跡群1』 1986 前原町教育委員会			
24	瓜生秀文 『JR筑肥線複線化用地内遺跡群』 2000 前原市教育委員会			
25	鏡山猛 『怡土城址の調査他』 1937 日本弧文化研究所			
26	林覚 『志登遺跡 第4次調査』 1985 前原町教育委員会			
27	平尾和久他 『泊リュウサキ遺跡』 2009 前原市教育委員会			
28	河合修 『一の町遺跡』 2009 志摩町教育委員会			
29-1	菅波正人 『元岡・桑原遺跡群4』 2005 福岡市教育委員会			
29-2	久住猛雄 『元岡・桑原遺跡群6』 2006 福岡市教育委員会			
29-3	菅波正人 『元岡・桑原遺跡8』 2007 福岡市教育委員会			
29-4	久住猛雄 『元岡・桑原遺跡群1』 2002 福岡市教育委員会			
29-5	米倉秀則 常松幹夫 比嘉えりか 『元岡・桑原遺跡群23』 2014 福岡市教育委員会			
29-6	米倉秀紀 『元岡・桑原遺跡群24』 2015 福岡市教育委員会			
29-7	米倉秀紀他 『元岡・桑原遺跡群27』 2016 福岡市教育委員会			
30-1	二宮忠司 『今宿五郎江遺跡 1』 1987 福岡市教育委員会			
30-2	二宮忠司 『今宿五郎江遺跡 2』 1991 福岡市教育委員会			
30-3	杉山富雄 『今宿五郎江遺跡 6』 2007 福岡市教育委員会			
30-4	杉山富雄 『今宿五郎江遺跡 7』 2008 福岡市教育委員会			
30-5	加藤隆也 『今宿五郎江遺跡 8』 2010 福岡市教育委員会			
30-6	杉山富雄 『今宿五郎江遺跡 16』 2014 福岡市教育委員会			
31	森本幹彦 『谷遺跡2・女原遺跡5』 2012 福岡市教育委員会			
32	森本幹彦 『大塚遺跡5』 2012 福岡市教育委員会			

第1表 糸島地方木器出土遺跡一覧表(遺跡番号は第1図位置番号に対応)



第2図 伊都国歴史博物館収蔵木器実測図1 (2は1/6、それ以外は1/6)

出土木器 (第2図1 図版2-1)

1は、諸手鋏である。両端の刃部ともに大きく欠損しており、器表の劣化も進行しているが、柄孔の円形隆起が残存し、身の裏側に削り出されている。身部は残存長22.4cm、幅10.8cm、厚さは1.5cmほどで、柄孔隆起部の身厚は3.6cmである。

刃の形状について、現状では鋏面の両側とも二又状を呈しているが、図の上側では又分かれ部が身の中心を通り、端正な「コ」の字状を呈し、人為的な加工と考えられるのに対し、下側では、又別れ部の中心位置がやや右に寄っており、木器の表面に剥離欠損した痕跡が認められたことから、意図的な加工によるものではないと考えられる。このことから、諸手鋏の刃部は、平鋏と二又鋏の二通りに加工されていた可能性が高いと推定され

る。

異なる刃をつくり出す諸手鋏の確実な例としては、下稗田遺跡(行橋市・註8)出土資料(第3図1)が知られるが、類例が少ない形態と言える。

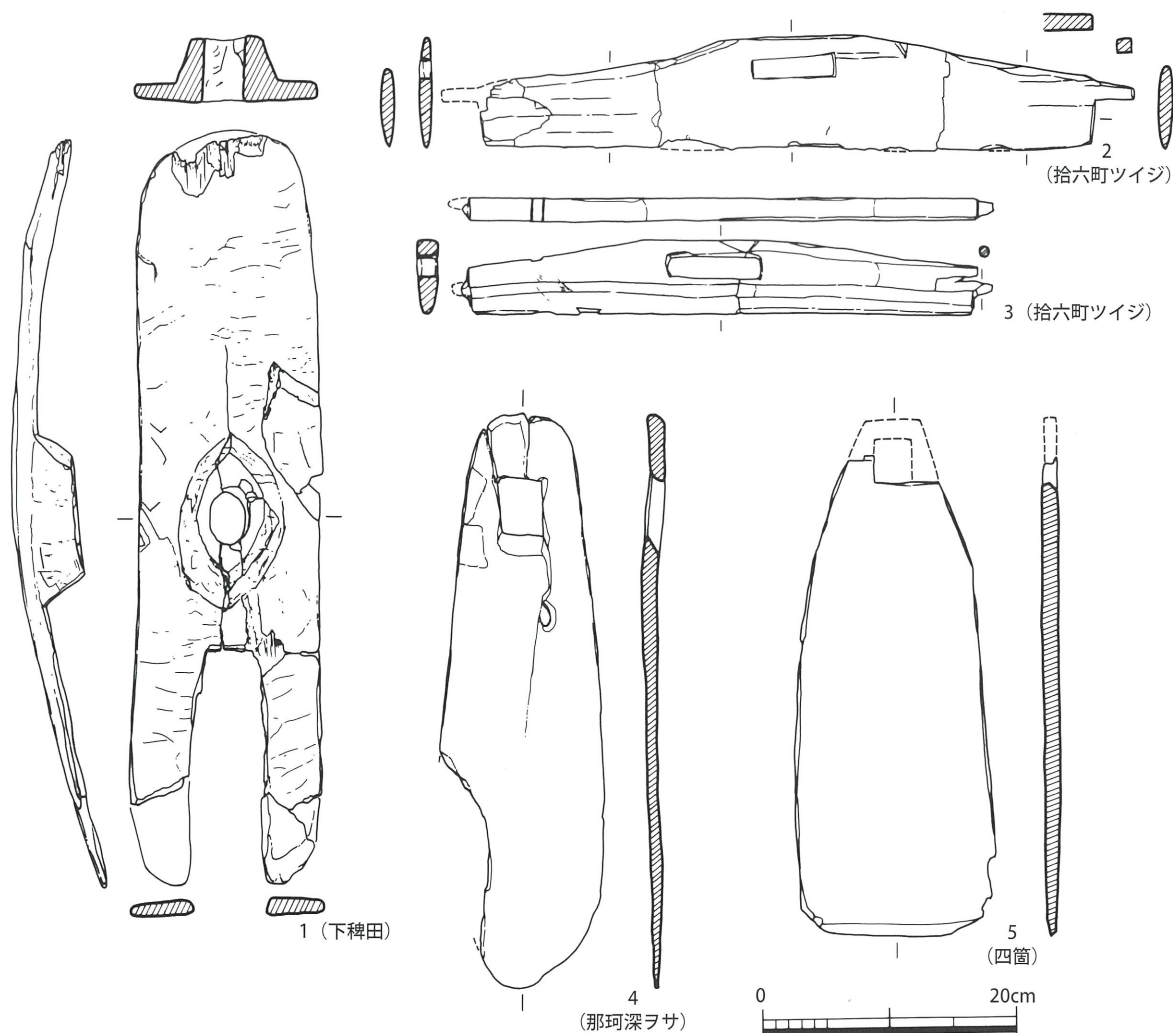
樹種はアカガシ亜属材の柾目取りである。

(2) 池田大五郎遺跡

遺跡の概況

前出の池田中上町遺跡の西に隣接して位置し、国道202号線バイパス建設工事に伴う発掘調査で確認された(図版1-2)。

調査地点は、池田中上町遺跡と瑞梅寺川の氾濫原に挟まれた標高11mほどの沖積地で、調査地点中央部の微高地とその周辺から時期絞り込み、二重口縁甕、高坏、鉢などの土器が出土し、その周囲に黒灰色粘質土層が広がっていた。概要報告



第3図 参考木製品実測図(1/6)

書ではこの一帯が、古墳時代前期の水田であった可能性が指摘されており（註9）、黒色粘質土の上に砂層が堆積し、砂層によって埋没した足跡状の斑状の窪みが検出されているが、畦畔などは確認されていない。

木器は黒色粘質土層中から出土し、農具、矢板、杭など出土している。

②出土木器（第2図2～5）

2～5は、同形同大の板製品で、発掘現場では6枚がまとまって出土した（図版1-3）が、そのうち残存状態の良好な4枚を掲載した。

長さ54cmほどに切りそろえた幅4.2cm～4.8cm、厚さ9～1.2mmほどの薄い板材で、縁辺の一方の両端を浅く斜めに削いで傾斜をつけ、反対側の木口角をL字形に切り込んで長さ2.0cm、幅1.3cmほどの柄を削り出している。また、いずれも図の下辺を表裏から削り、刃状を呈している。

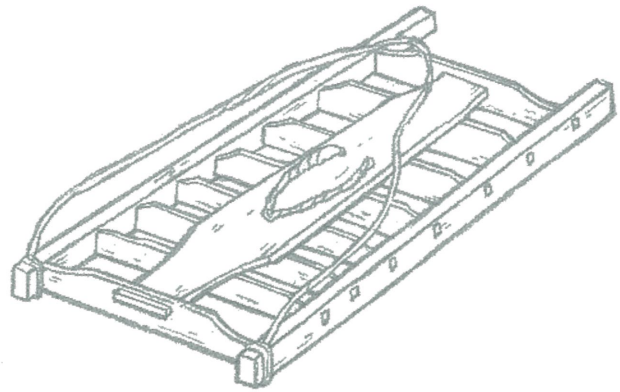
2、3はスギ、4、5はシイの柾目取り材が用いられており、形状、法量が似通っていることから規格性の強い組製品の構成材と考えられる。

この木器の用途については、近隣の遺跡で基本形状が似ている拾六町ツイジ遺跡（福岡市西区）（註10）出土の木器（第3図2、3）を参考にしたい。この木器は奈良時代の資料とされており、2は長さ51.6cm、幅9.1cm、3は長さ41.9cm、幅5.7cmを測る。板の両小口に柄を削り出し上辺の先端付近を斜めに削いでいる点、また、側縁の一方を表裏から刃状に削り出している特徴が共通している。

上原真人氏は、この木器を組合せ式田下駄（枠型田下駄）の横枳板と推定した（註11）。

拾六町ツイジ例では中央上部に長方形の柄穴があけられているが、これは、足板の両端を柄穴に嵌めて固定する機能を有すると考えられており、池田大五郎例にはこの柄穴がないため、枳の内側にわたされた横枳である可能性が高く、仮に出土した6枚の板が片足分の横枳とし拾六町ツイジ出土の板と組み合わせた姿を想像すれば、第4図のような形状が考えられる。

秋山浩三氏は、同種木器について「これまで考古資料「大足」の機能・用途として理念的に想定されてきた代踏み・均し、残程・緑肥踏み込み」用の農具と明確に規定している（註12）。このよ



第4図 池田大五郎遺跡出土板製品の使用状態の推定

うに規定した場合、横枳の下端が刃状に削り出された理由は、土壌を粉碎すると緑肥を水田中により深く鋤きこむための工夫であったのかもしれない。

3は、アカガシ亜属の柾目材と田にて二又鋤である。一方の刃の先端部を欠くが、ほぼ全形を知ることができる。全長40.8cm、幅15.4cm、最大厚2.0cmを測り、刃部は外縁側が外側に弧を描きながら膨らみ、又別れ部はV字に切り込む。柄頭は丸く整形され厚手であるのに対し、刃部は薄く成形されている。柄孔の着角度度は40度未満で鋭角になる。

4は、残存長35.8cm、幅11.2cmを測る板材で、アカガシ亜属の柾目材で製作されている。下辺が緩く「U」字状にカーブし、全体は細身の無花果状をなしている。現状では櫛のブレード部にも似ているが、厚さは4～8mmほどと比較的薄いことが櫛とすることには躊躇させる。

下端は何か打ち付けたことによりささくれたような状況を呈していることから平鋤の可能性もある。上部のL字の搔き込みは、出土状況写真（図版2-6）では破損した方形柄孔のようにも見える。この場合、平面形は那珂深オサ遺跡（第3図4・註13）、四箇遺跡（第3図5・註14）の平鋤などが本来の形状の参考になるかもしれない。ただし、このままの身幅で柄孔を復原しようとする、柄孔幅が極端に狭くなるが、右側面は刃状に再加工し、別用途に利用したのかもしれない。

このほか、前掲概報には残存状況が良好なアカガシ亜属製の一木造りの木製鋤の出土が報告されている（図版1-5）。掬い部にU字形鉄製鋤先を装着するための段を有する。

また、握り部は横木の手前で二又に分かれ、外形は半円形を呈している。横木は断面が円形で、又分れ部よりも厚く削り出され、さらに両側縁に向けて小さく突出するなど、丁寧かつ装飾的な要素が認められるのも特徴である。

しかし、この資料は平成6（1994）年の福岡大渇水期に資料保管水槽の水が枯渇する事故により収縮変形してしまった。

（3）本田孝田遺跡 遺跡の概況

本田孝田遺跡は、長野川中流左岸の段丘上、現在の堀(ほり)集落北端の標高16.5mの水田中に立地する弥生中期～古墳前期にかけての集落遺跡である。平成元年度に県道本・加布里線の改良工事に伴い発掘調査が行われた。

調査地点では、東から段丘面に向かって伸びる溝状遺構が確認され、大溝と報告されている。

大溝は、幅12mほど、平坦面をなす台地の縁辺から中心に向かって伸びている。大溝の断面は細かな凸凹をみせながら急勾配で下り、溝の底面は湧水層まで達しており、調査時でも常に湧水に悩まされた。報告書では自然地形の谷と推定されたが、人為的に掘削された遺構である可能性が高いと考えられる。

溝の底には、弥生中期末から後期初頭にかけての完形を含む大量の土器が出土したが、これをさかのぼる時期の遺物は含まれておらず、土器の投棄が突如開始されたことをうかがわせる。

また、土器の多くに口頸部の打ち欠きや、胴・体部の穿孔などが施されており、祭祀行為に伴って溝に投棄されたものと考えられる。また、併せて青銅製鋤先、黒漆塗りの容器蓋、アワビ形土製品などの特殊遺物も出土している（註15）ことなどから、祭祀は湧水点にまで達する大溝の掘削を契機として開始されたものと推測される。

余談になるが、溝状遺構の北20mでは、ガラス小玉を副葬した2基の小児用甕棺墓が出土しており（註16）、北400mの丘陵上には、弥生時代終末のガラス釧が副葬された東二塚遺跡（註17）も近い。長野川流域で最古の前方後円墳に位置づけられる本林崎古墳が、遺跡の南東800mに立地するなど、本遺跡群の周辺に当該流域の弥生後期～古墳前期首長墓が集中して分布することから、本

遺跡群が当該河川流域の拠点集落と考えている。

溝状遺構の北岸では径50cm以上の大きな柱穴を多数検出した。溝に隣接して大型の掘立柱建物が建てられていた可能性もあり、大溝で繰り広げられた祭祀との関係、引いては当該集落遺跡における調査地周辺エリアの集落における機能を探るうえでも注意を要する。

②出土木器（第2図5, 6, 第3図）

出土木器は少ないが、既報告資料の再掲を含め紹介する。

農具

5は、柄孔を中心に鋤の頭部である。側面が柄部から刃部に向かって直線的に伸びていることから、又鋤ではなく身幅の狭い平鋤と考えられるが、乾燥収縮が進んでおり変形が著しい。

柄頭は丸身を帯び、柄孔は長方形を呈し、3.2×6.8cmと大きい。

6は、平鋤である。実測時点で乾燥し収縮変形して小片と化していたが、出土状況写真（図版1-7）をみると、本来は釣鐘形を呈していたことが確認できたため、これをもとに不足部分を樹脂充填して旧状に復した（図版2-5）。残存長27.1cm、復元推定幅16cmを測り、着柄角度は概ね45°ほど。広鋤である。

当該地方の平鋤は、弥生中期中葉までは長方形の下駄状プランであったが、中期後半には鐘形プランの平鋤が出現しており（註18）、伴出した土器の時期と齟齬はない。

第5図1は、黒漆塗りの容器底板である。ツゲの柁目材を用いており、径8.2cm～8.3cm、厚さ9mmの円盤状に加工した板の上側縁部を幅1.7cm、約30度の勾配で斜めに削ぎ、下面は、円周に沿って幅0.9cm、深さ2mmほど縁を削って段を作り出す。

外面は全体に黒漆が塗られ、平坦面の縁に沿って筆状の工具で幅4～5mmで朱線の円文を描き中心に円点文を1個描いている。円文の筆跡をみると、轆轤や回転台などを用いて遠心力で一気に描いたのではなく、小刻みに蓋を回転させながら手描きされたことがわかる。

下面(裏側)も外縁に沿って幅2mmほどの赤彩が観察できるが、その内側では突如漆塗りが途切れ、そこには、本来接着されていた断面がコの字

形を呈する別材が接着から剥離したような痕跡が観察され、その内側にも黒漆に固められたような繊維質の素材が付着していた。容器本体の接着痕跡と考えられ、さらにその内面には、半透明の樹脂があたかも隙間からはみ出してした方に盛り上がったような状態も観察された。裏面の内側の一段盛り上がった部位では、半透明の樹脂状の塗料が付着しており、次項の所見で述べられているように、漆が塗られていたことが判明した。

図版2-8は、小型の鉤状の木製品で、全長5.1cm、頭部は2.0×1.4mmの円形を呈する。樹種はアカガシ亜属で円錐形の頭部から伸びる細い軸部の先端は針先のように尖っている。用途は不明である。

3. 自然科学的検討

一本田孝田遺跡出土の漆塗品の塗膜について

(株)吉田生物研究所

本田孝田遺跡出土の漆塗木製品(第5図1)の表面に塗られた漆、ならびに裏面に付着した漆膜について、観察所見を以下に報告する。

それぞれに数ミリ四方の破片をサンプリングし、エポキシ樹脂に包埋し、硬化させた後、研磨を経て薄片化し、光学顕微鏡下で観察した。

まず、蓋の上面(外面)に塗られた漆膜についてであるが、下地層と漆膜が観察された(巻頭図版5-1)。

下地層：透過光下では漆黒色を呈し、大きな粒状の黒色の物質を含む(巻頭図版5-2)。漆黒色の部分は、もやもやとした雰囲気、膠着材に黒色の物質を混和したように観察される(巻頭図版5-3)。これらの物質については機器分析を行っておらず、その材質は不明である。

漆層：文様部からサンプリングを行い、プレパラートを作製したが、下層の漆層は、透過光下では黄色を呈しており、微量の黒色顔料を含む層と含まない層に分けられる。上層の漆層には、黄色の漆層の中に赤色で筒状の形態を下パイプ状粒子のベンガラが多数認められる(巻頭図版5-4)。

次に、裏面に付着した漆様の物質についてであるが、木胎の木質繊維上に試料により1~2層の、

黄褐色の塗膜が観察される(巻頭図版5-5, 6)。木質繊維の中にもこの黄褐色の物質は認められる。塗膜の外面側は約5 μ mの幅で褐色を呈している。この塗膜を構成する物質は、その色調、そして日光(紫外線)によって劣化している点等から判断して漆である。

以上の観察所見に多少の考察を加える。まず木製品の裏面の漆膜についてであるが、表面に塗られた漆膜の層構造と比較すると木胎に直接漆が塗られている。つまり下地が施されていたという点が気になる。下地が施されていないというのは工程の省略、あるいは材料の漆の節約と解釈できる。これは、裏面の中央付近には、漆が塗られずに露胎であるという状態と符合する最後に漆の上面の漆膜についてであるが、この層構造はこれまでに調査された中国の戦国時代末期の漆器の層構造との共通点が多い。その共通点とは、下地の材料の様子、黄色味の強い漆の色調、下地層と漆層の層構造などである。

ただし、これまで調査された中国の当該期の漆器に使用されている赤色顔料は、ベンガラでなく、朱であるという点は大きく異なる。

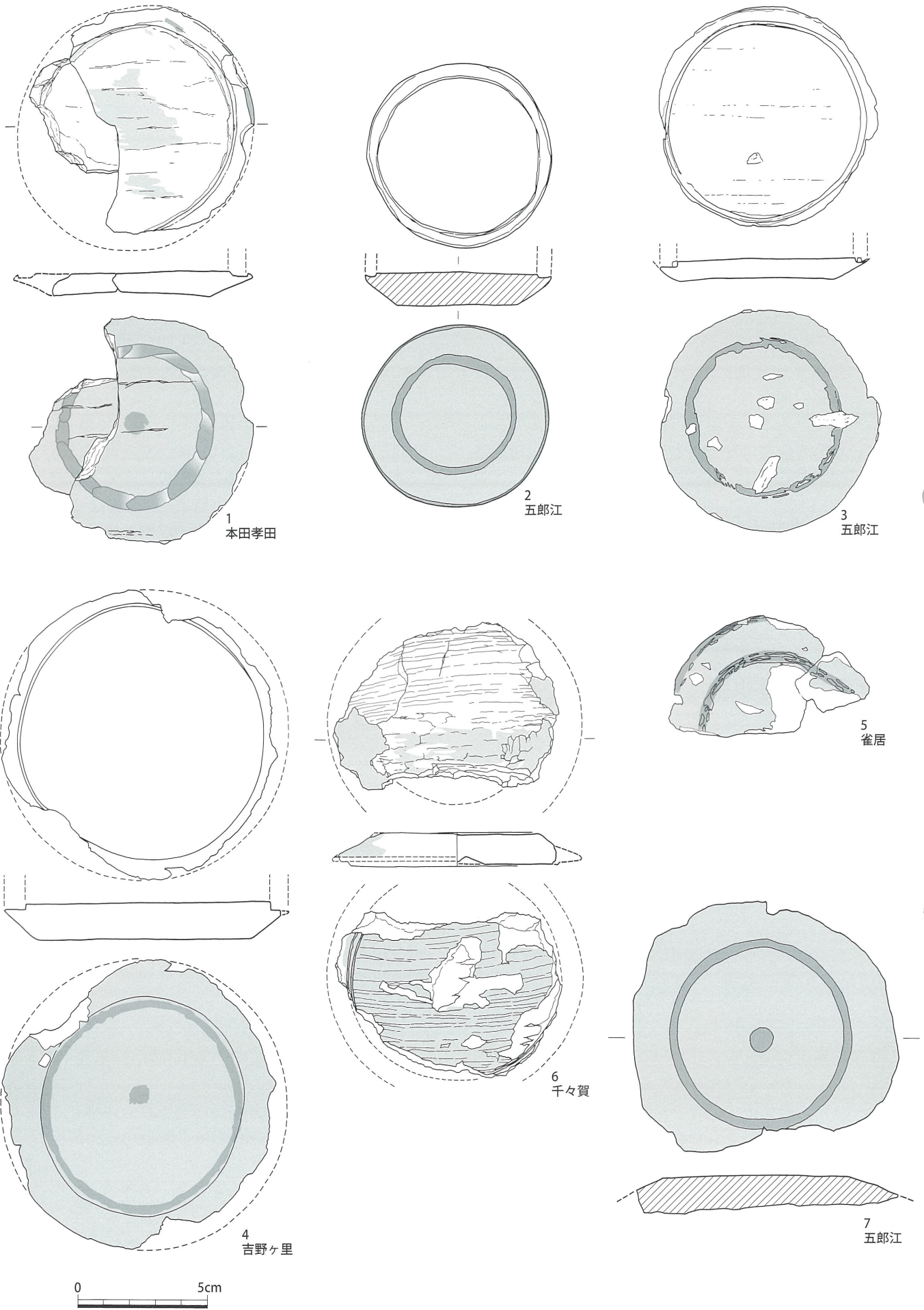
この資料と同様の器形をとる漆器は日本に限らず東アジア圏で出土している。その分布を考える上で、今後、漆器の下地の材料調査が東アジア全域を視野に入れて行われ、個々の漆器の生産地や漆器製作技術の系統が明らかになることは意義深いことだろう。(1998年12月)

4. おわりに

今回紹介した資料のなかで注目したのが本田孝田遺跡出土の漆塗り容器材である。近年、同型の資料が千々賀遺跡(註19)、吉野ヶ里遺跡(註20)、雀居遺跡(註21)今宿五郎江遺跡(註22)などから出土し、管見に触れるだけでも12例におよぶ(第5・6図、表2)。

形態的には、円形の薄板の縁辺を斜めに削り笠形に成形し、裏側縁辺部は数ミリ程度の浅い段を設ける点に共通点がある。

また、外面の基層に黒漆を塗り、赤漆の同心円文を施すことが共通する施文パターンとなっているが、千々賀遺跡資料(10)には、連続鋸歯文や放射状の細線も施されており、また中心の点文



第5図 黒漆溶器蓋集成 (1/2)

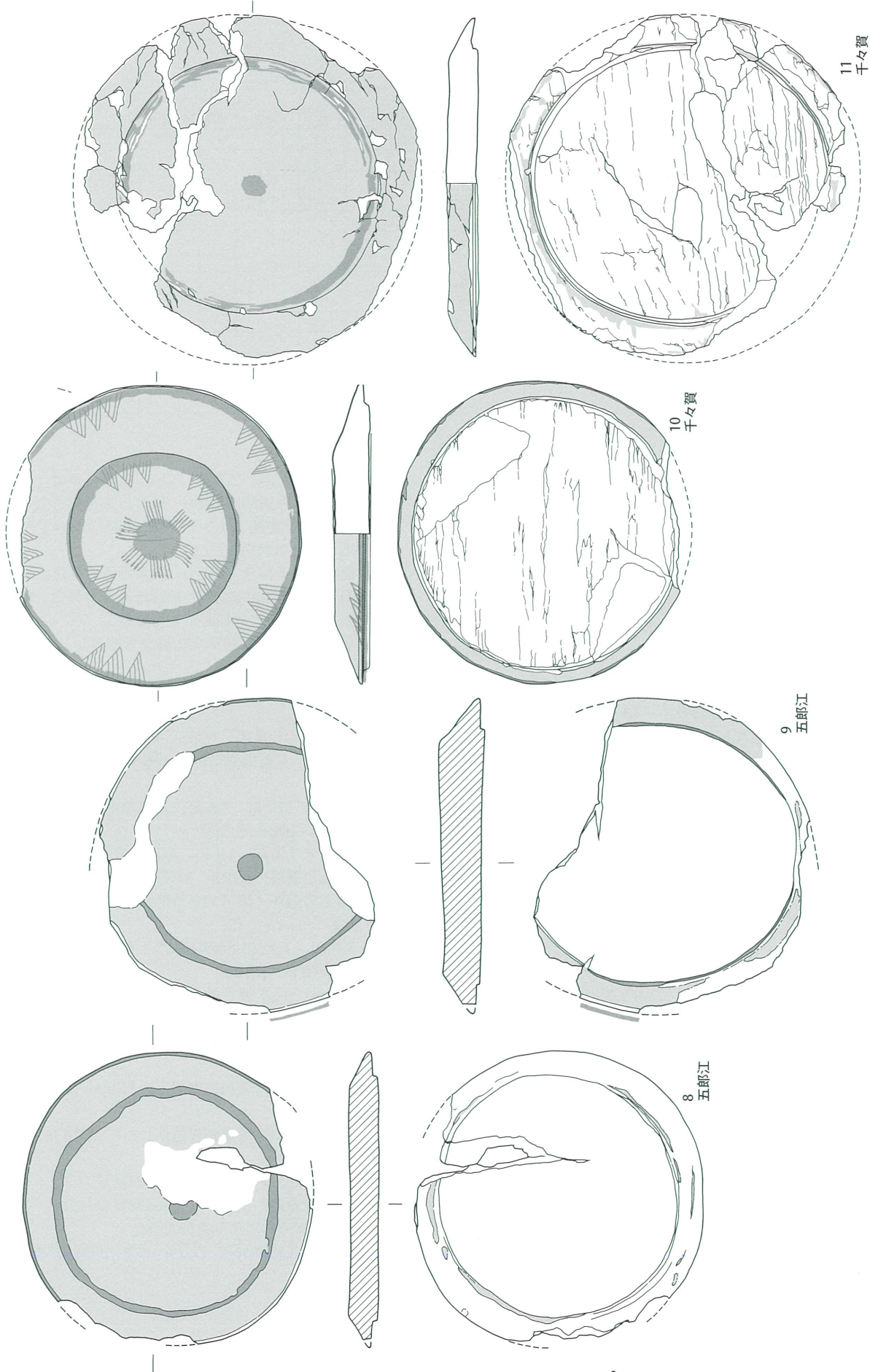


表2 漆塗笠形容器部材集成

番号	遺跡名	市町	出土遺構・層位等	時期	材質	文様構成	径	厚さ	材質	赤色顔料	備考
1	本田孝田	糸島	E-1グリッド第3層	後期前葉	底板	黒地に同心円文	8.2	9	ツゲ	ベンガラ	1/5欠損
2	今宿五郎江	福岡	M1203-19層	後期	底板	黒地に円文	7.2	1.3			
3	雀居	福岡	I区SD-02上層		底板	黒地に同心円文	8.6	0.9		ベンガラ	内面段外縁まで黒漆
4	吉野ヶ里	吉野ヶ里	225-5-F-No14	中期～後期	底板	同心円	9.55	1.4			
5	雀居	福岡	I区SD-02上層		蓋	黒地に(同心)円文	8.5?	—		ベンガラ	半折品 内面丹塗なし
6	千々賀	唐津		中期～後期	蓋	同心円	12.5	1.1			内面段外縁まで黒漆 段部に薄い黒漆
7	今宿五郎江	福岡	M1203-19層	後期	蓋	黒地に同心円文	(11.5)	1.2			
8	今宿五郎江	福岡	M1203-19層	後期	蓋	黒地に同心円文	10.6	1.1			
9	今宿五郎江	福岡	M1203-44層	後期	蓋	黒地に同心円文	11.4	1.4~1.6	クリ		
10	千々賀	唐津		中期～後期	蓋	(点)一円	9.6	1.2			内面段外縁まで黒漆
11	千々賀	唐津		中期～後期	蓋	黒地に円点-放射線- 鋸歯文-円-鋸歯-円	10.8	1.4			内面段外縁まで黒漆
12	吉野ヶ里	吉野ヶ里	237-S D 308	中期～後期	蓋	同心円	11.2	1.3			実測図未報告

※番号は第5、6図遺物番号に符合する。

の有無など個体間の小差も認められる。また、法量は径7.2cmの小型品(2)から12.5cmの大型品(6)まで幅があり、大きさにおいては厳格な規格性に乏しいようである。

この木器に類する資料は、既に茶戸里遺跡(註23)、新昌洞遺跡(註24)など朝鮮半島南部の遺跡における出土が知られており、彼の地からの強い影響を受けたのとも考えられるが、一方、半島例ではつまみ状の把手がついたものが多く、赤漆による彩色施文が施されたものは認められない。千々賀例に施された連続鋸歯文は、倭人の嗜好にもとづき施された文様と考えられることから、北部九州で新たに製作されたものと考えられる。

また、出土遺跡は、いずれも各地の拠点的な集落と位置付けられていることから、漆器であることと併せ、北部九州社会における有力集団のネットワークで流通した特殊器物であることも予感させる。

なお、資料1～4では、裏面の段部分に漆などを用いて別材と接着した痕跡が認められた。7では、別材が接着したまま出土し、また、4では、接着していた容器本体表面の平行細線文が施された漆膜の出土も報告されている(註25)。

2について、報告者の杉山富雄氏は、筒形容器の底板と推定しており、今回の集成ではこの指摘を受け、接着痕を有する資料については天地逆にして底板として図化している。

しかし、もし、これらが従来の見解通り蓋であるのであれば、内容物の厳重な密閉が意図されたこととなり、取められた内容物とともに、極めて興味深い使用形態といえよう。

註

- 『元岡・桑原遺跡』2002 福岡市教育委員会
- 『泊リュウサキ遺跡』2006 前原市教育委員会
- 岡部裕俊 野田純子『みえてきた伊都国人のくらし』1995 前原市教育委員会
- 『今宿五郎江遺跡8』2010 福岡市教育委員会 他
- 『元岡・桑原遺跡』2014 福岡市教育委員会 他
- 『千里遺跡』2005 福岡市教育委員会
- 『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査概要』1991 前原町教育委員会37
- 『下稗田遺跡』1990 行橋市教育委員会
- 註7に同じ
- 『拾六町ツイジ遺跡』1983 福岡市教育委員会
- 上原真人『木器集成図録』1993 奈良国立文化財研究所
- 秋山浩三「田下駄・大足」と関連木製品『季刊考古学104』2008 雄山閣
- 『那珂深オサ遺跡』1990 福岡市教育委員会
- 『四箇周辺遺跡』1990 福岡市教育委員会
- 『本田孝田遺跡・東スス町遺跡』1993 前原町教育委員会
- 岡部裕俊「長野川下流の遺跡と遺物」『伊都国歴史博物館紀要5』2009
- 原田大六「日本最古のガラス」糸高文林 創刊号 糸島高校1950
- 今宿五郎江遺跡では、中期後半の鐘形の平鍬が出土している。
- 『義昌茶戸里遺跡発掘進展報告』1989 韓国考古美術研究所
- 『光州新昌洞低湿地遺跡IV遺跡』2002 国立光州博物館
- 『千々賀遺跡』2000 唐津市教育委員会
- 『吉野ヶ里遺跡』2000 佐賀県教育委員会
- 『雀居』2000 福岡市教育委員会
- 『今宿五郎江遺跡16』2014 福岡市教育委員会
- 註22に同じ



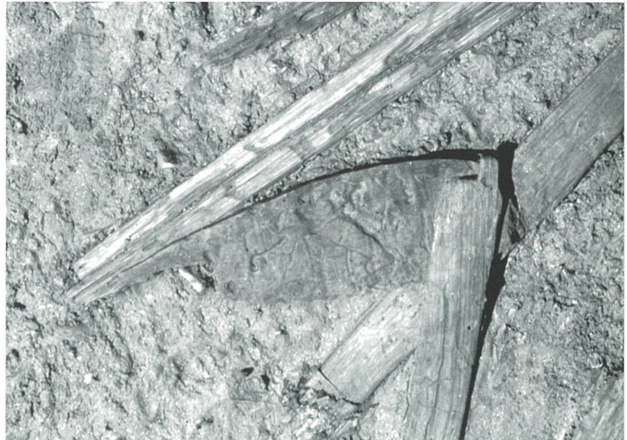
1. 池田中上町遺跡自然流路の木器溜り



2. 池田大五郎遺跡調査区全景



3. 池田大五郎遺跡木器出土状況



4. 池田大五郎遺跡平鍬状木器出土状況近景



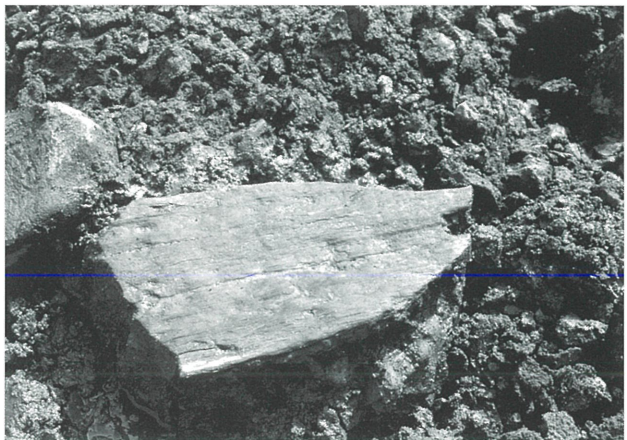
5. 池田大五郎遺跡二又鍬出土状況



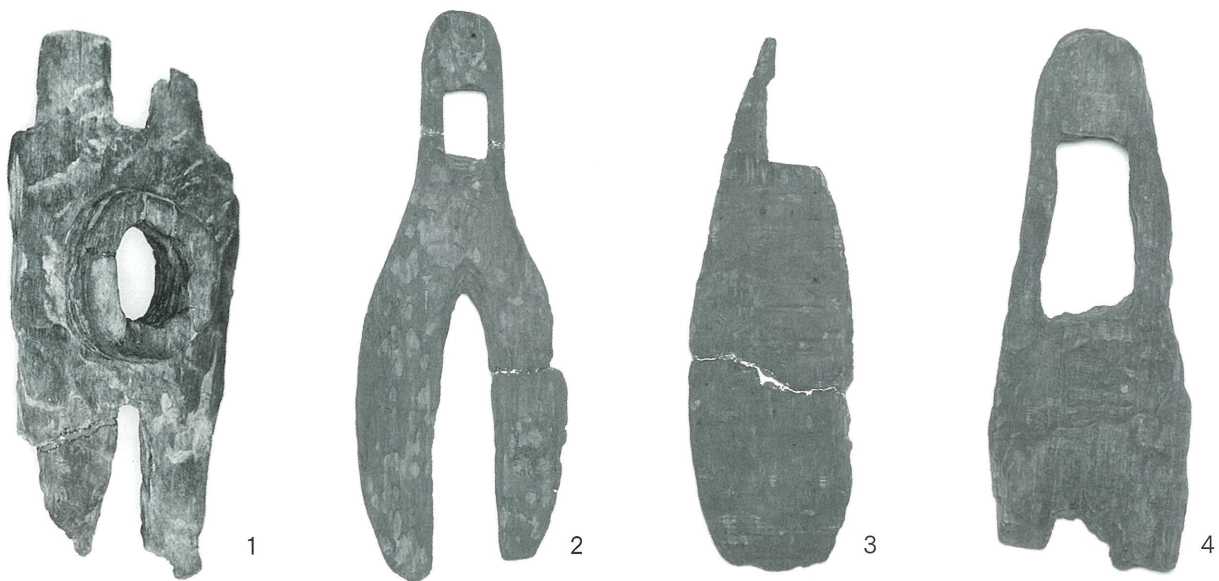
6. 池田大五郎遺跡一木鍬出土状況



7. 本田孝田遺跡溝状遺構全景



8. 本田孝田遺跡平鍬出土状況



土する朱を附したる石片と全然同等なり。大塚権現所在の円墳にも元来之と同様なる所謂箱式石棺を存せしなるべく、余が大正二年夏此塚に上りたる時においても恁る石片を出す事多からざる今日と大差無きによれば、高橋君の既に論述せられたる如く銅剣を出したる上述の古墳は大正二年よりも遙前に於て一度発掘せられたるは疑いなるべし。余は、此等の円墳を存セル丘陵附近を搜索して旧権現社地丘麓の民宅間の小圃に十二個の赤素焼土器片を発見し、尚黒曜石片一個を得たり。土器は今回目標として採集に努めたるものと同種にして、中に(8)及(10)と同式とみるべき口縁部は辺並(52)と同式なる底部破片を存せり。今回余の絵たる経験によれば丘陵ある地域における遺跡は目下田地となれる平地に臨める丘麓にあれども、大塚に於ては恰も恁る部が今率ね宅地となれるにより搜索甚だ困難にして、重ねて操作を施行せば多少の遺物を得る成るべしと推すれども、他地における如く有望ならず、此地尚頻回調査すべき必要あるにより姑く之を番外に置く。

(註)

(1) 福岡藩によって編纂された「筑前三地誌」のひとつで、文化十一年(一八一四)年に『筑前国續風土記附録』の再吟味を命ぜられた青柳種信が、各地の調査報告書をもとに实地調査を行いながら編纂したものである。記述が実証的であることが特色とされ、考古学的資料としての評価も高い。

(2) 下山正一他「糸島低地帯の完新統及び貝化石集団」『九州大学理学部研究報告』一九八六 九州大学理学部

(3) 『前原町文化財地名表』一九七四 前原町教育委員会

(4) 柳田康雄『三雲遺跡Ⅲ』一九八二 福岡県教育委員会

(5) 岡部裕俊『泊桂木遺跡』一九九七 前原市教育委員会

(6) 『糸島郡誌』一九二六 前原町第八章社寺村社八幡宮の項に「今より五六年前もと大塚にありし熊野神社を合祀せり。」と記されている。

(7) 高橋健自「銅銚銅剣考(一)」『考古学雑誌』六ノ十二 一九一六

高橋健自「銅銅剣考(三)」『考古学雑誌』七ノ二 一九一六

(8) 泊八幡宮境内に掲げられた由緒書には、明治四三年に大塚神社から合祀された旨が記されている。

(9) 中山平次郎「九州北部に於ける先史原史兩時代中間期間の遺物に就て」『考古学雑誌』七ノ一〇 一九一七

(10) 岡部裕俊「古記録に記された三雲・井原遺跡地内の古墳」『三雲・井原遺跡Ⅳ―総集編』二〇一三 糸島市教育委員会

(11) 寺沢薫「纏向型前方後円墳の築造」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズⅣ 一九八八

(12) 粗面玄武岩を用いた古墳として、東五反田遺跡箱式石棺墓(Ⅰ期)、篠原遺跡箱式石棺墓(ⅡⅢ期)、本林崎古墳(Ⅰ期)、センシュドウ古墳(Ⅱ期?)、御道具山二号墳(Ⅱ期)、一貴山銚子塚古墳(Ⅲ期)、鋤崎古墳(Ⅳ期)、丸隈山古墳(Ⅴ期)、釜塚古墳(Ⅴ期)などが上げられ、福岡地方でも、京ノ隈古墳(Ⅲ期)、老司古墳(Ⅰ四号石室(Ⅳ期)など、前期Ⅰ中期前葉の古墳の埋葬施設に多く使用されている。

なお、以前、同種の石材を「安山岩」と誤認し報告した(井原1号墳の測量調査「井原遺跡群」一九九一 前原町教育委員会)が、唐木田芳文氏に実査いただき粗面玄武岩である旨のご教示をいただいたので訂正する。

(13) 唐木田芳文「石材」『老司古墳』一九八九 福岡市教育委員会

野市)、那珂八幡宮古墳(福岡市)などともに纏向古墳群に次ぐ規模を有する大型古墳の集中地帯を形成した可能性も浮上してくる。古墳時代開始期におけるわが国の社会動態を探るうえで、新たな検討課題を提示するものであり、引続きその解明に向けた調査研究が必要と考える。

史料①

青柳種信『筑前國續風土記拾遺』卷五十 志摩郡下
平成五(一九九三)年刊 福岡古文書を読む会 編校訂

熊野神社

大塚に在。此所の産神なり。処祭紀州熊野三所の神なりと云。祭禮九月廿二日也。此神社の地は大に築たる塚上也。本社のある所を強く踏は地下に鳴声あり。これ地中空虚あるか故也。石棺このうちに在へし。近年地下より獣の形に似たる石一ツ出たり。古昔の陵墓に立たりし石人石馬の類にしてこ八隼人に擬したる石狗なるへし。大和國添上郡元天皇の陵の隼人石の類ひなり。圓丘高石階四丈一尺北面也。塚上の廣横四間入六間半有。四方に林木茂れり。南方に峽有。長拾壹間其尾の末に小山有。其の上平らなる所六間有。是地道の入り口なるべし。大和國等にあるいにしへの陵の形状皆かくのことし。凡て此塚山の廻り八十六間有。其外八田なり。是むかしの池隄址なるへし。此塚ある故に人家をも大塚といふ。いにしへいかなる人の墳陵なりしやいまた其由を知らず。

史料②

高橋健自「銅矛銅劍考(一)」「考古学雑誌」六ノ十二
一九一六

筑前国糸島郡前原村大字泊大塚 二口

大塚といふは山頂にある古墳にして、石槨石棺の設なし。この古墳より管玉一個と共に発掘せられたりといふ。(和田千吉氏聞書)

史料③

高橋健自「銅矛銅劍考(三)」「考古学雑誌」七ノ二 一九一六
筑前国糸島郡前原村大字泊大塚 二口

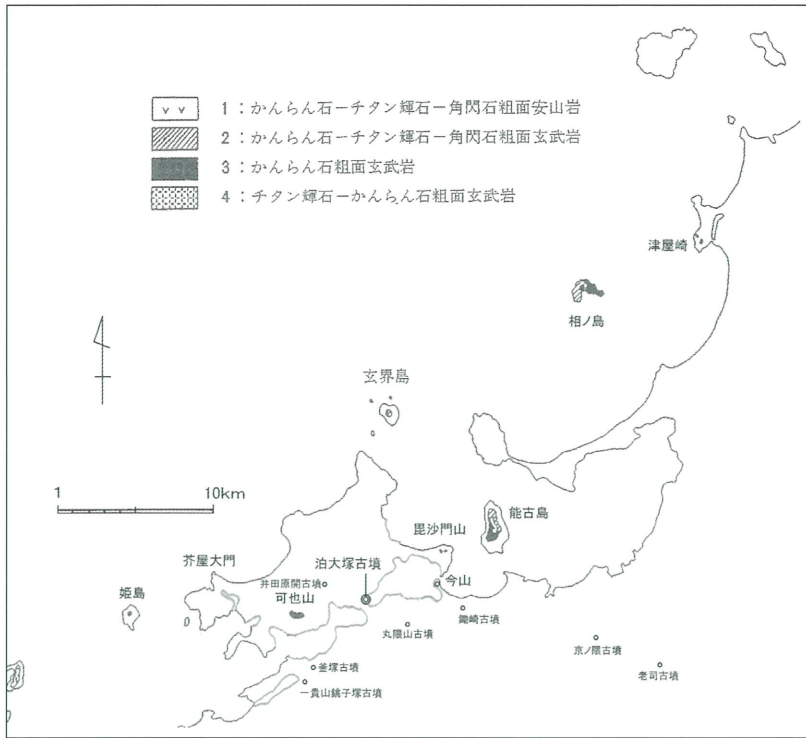
遺跡は、丘陵上にある円墳にして、墳上社殿あり大塚権現と称したりしが、神社合祀の結果大正二年春社殿を撤したる際、地下一二尺にして銅劍残欠二個を発見したりなるといふ。踏査すると扁平なる割り石の面に朱の著きたるもの所々にあり。小口にあらで平らなる面の著きたるより考ふれば、組合式石棺の類ありしなるべく、大正二年より遙以前に於て発掘せられしものの如し。この墳より大塚の部落に至る間路傍田畔に一見碑の如き扁平なる割り石の立てるあり。里人鎌磨地蔵と称し、これに触るれば祟有と伝う。是れ或は彼の石棺の一部分にあらざるか。発掘者に質すに銅劍以外は何物もなかりしといふ。前稿管玉一個伴いし由記したるは誤りなり。但し銅劍は糸島郡役所にては泊に保管せりとの事なりしかば、泊区長は始め発掘者等に就きて聞くに、郡役所に差し出したるまま未だ返らずとて、遂に見ることを得ざりしは遺憾なり。

史料④

中山平次郎「九州北部に於ける先史原史兩時代中間期間の遺物に就て」『考古学雑誌』七ノ一〇 一九一七

(附) 糸島郡前原町大字泊大塚

此の地の丘上の円墳(旧大塚権現所在地)より大正二年春銅劍残欠二個を出したるは、既に高橋健自君の本誌七ノ二に説述せられたる所にして、銅劍発見地として一応此付近を踏査したりしに、以上の塚より西に当れる尾筋にも三つの円墳並存し、三墳中の下方の一に発掘の痕あるを発見したり。此塚最少にして高約一間に過ぎず。中央部に封土を穿ちたるところより其底部に当り薄き平石を立て函形に囲みたる幅約一尺の所謂組合式箱式石棺の端を露出し尚此の地上に大小の平石多く散乱せり。石棺の内面及散乱せる平石の一面には朱の附着を示し、石質大塚権現所在部より出



第5図 福岡付近における新生代玄武岩質岩石の分布と泊大塚古墳の位置 (『老司古墳』1989福岡市教育委員会図127をもとに作成)

写真 14 泊大塚古墳の後円部墳頂から古今津湾 (近世干拓により耕地化)、博多湾方面を臨む



しかし、その一方で、古今津湾への眺望は、御道具山古墳よりも優れていることで、築造順について腑に落ちないところがあったが、今回、泊大塚古墳が纏向型前方後円墳である可能性が高まったこと、古墳の築造時期について再考が必要となった。

②について、当該地方で箱式石棺を埋葬施設とする前方後円墳として確認されているのは、高祖東谷1号墳、津和崎権現古墳、井原1号墳、荒毛2号墳などが知られているが、いずれも前期に位置づけられている。また、粗面玄武岩を用いた石棺を有する墳墓は本林崎古墳裾の箱式石棺墓、高祖東谷1号墳、津和崎権現古墳、東五反田遺跡箱式石棺墓など、当該地方における古墳時代初期の各地首長墳であり、泊大塚古墳が当該地方における最古段階の前方後円墳である可能性の高いことをさらに傍証する資料ともなる(註13)。

さて、板状剥離する粗面玄武岩の産出地は、当該地方周辺では限定的とされ、入手地としては相島(新宮町)、能古島(福岡市)、可也山(糸島市)などが有力候補地に挙げられている(第五図・註14)。

また、同種の石材を用いた古墳としては、竪穴式石槨を埋葬施設とした一貴山銚子塚古墳、京ノ隈古墳などの前期古墳、初期横穴式石室として著名な老司古墳、鋤崎古墳、丸隈山古墳など、糸島・福岡両地方の前期～中期の盟主墳と位置付けられる古墳で顕著に認められることから、当該地方における大首長のステイタスシンボルとして、これらの露頭から粗面玄武岩が優先的に入手された可能性が高い。

泊大塚古墳は、古今津湾の最深部の丘陵上に築かれており、古墳上に立てば、湾の全域を臨むことができる格好の位置にある。また、後円部径は四五・六mを測り、後代に築かれる丸隈山古墳に次いで古今津湾岸線における最大級の規模を有することを合わせて考慮すれば、当該古墳の被葬者が、古今津湾を拠点とし、玄界灘で展開された海上交通に深く関わった大首長であったと推測され、能古島、相ノ島などの粗面玄武岩を優先的に入手し使用したことも頷ける。

今回の泊大塚古墳の検討成果は、当該古墳がこれまで当該地方における空隙期となっていた定型化前段階の前方後円墳が存在する可能性を示すものであり、さらに全長七六mの墳丘規模は、原口古墳(筑紫



- ①泊大塚古墳 ②御道具山古墳 ③津和崎権現古墳 ④峰古墳 ⑤元岡 E-1 号墳 ⑥元岡池ノ浦古墳 ⑦元岡石ヶ原古墳 ⑧桑原金屎古墳 ⑨塩除古墳 ⑩潤神社古墳 ⑪飯氏二塚古墳 ⑫飯氏鏡原古墳 ⑬飯氏塚原古墳 ⑭飯氏 B-14 号墳 ⑮丸隈山古墳 ⑯女原 C-14 号墳 ⑰山ノ鼻 1 号墳 ⑱若八幡宮古墳 ⑲下谷古墳 ⑳谷上古墳 ㉑今宿大塚古墳 ㉒鋤崎古墳 ㉓稲葉 1 号墳 A 大日古墳 B 後口古墳 C 経塚古墳 D 北側古墳

第4図 古今津湾の範囲と周囲における前方後円墳の分布状況

の企画の原則比に近く、その要件を満たしているものの、クビレ部の幅はやや太めである。

寺沢氏の分類に当てはめると、後円丘に連結部が形成されて平面形は倒卵形を呈し、前方部が直線的に開くIIa型に分類されると考えられ、東田大塚、ホケノ山古墳と同様に属するものと考えられる。

なお、前方部の裾は、昭和三十六年の航空写真と現状を比較すると、埋め立てられ、現在も地下に埋没している可能性が高いと考えられ、将来、墳形の検証を行うことは可能と考えられる。

後円部に存在したとされる埋葬施設について、高橋健自、中山平次郎らの踏査・聞き取り調査の成果と、隣接する御道具山二号墳の発掘調査成果を相互に比較検証し、主体部が粗面玄武岩の板材を用いた箱式石棺ないしは竪穴式石槨である可能性が高いことを指摘した。泊大塚古墳は当該地においては大規模な古墳であるのに比して、箱式石棺一基だけというのは埋葬施設として寂しいものがある。竪穴式石槨他の埋葬施設の存在も考慮すべきであろうか。

最後に被葬者の性格について少し触れておきたい。当該古墳の留意すべき特徴として、

- ①前方部の平面形は低く短く撥型に開く「纏向形前方後円墳」の形状をとる。
 - ②埋葬施設は板状剥離の粗面玄武岩を用いた箱式石棺であった可能性が高い。
- ことが上げられる。

①について、これまで当該地方の最古の前方後円墳は隣接して立地し、箸墓古墳と相似形の御道具山古墳とし、泊大塚古墳では埴輪が出土していないことも考慮し、当該地法における埴輪出現の指標となる鋤崎古墳に先行する前期中〜後葉の築造としていた。



写真 13 泊大塚古墳に祀られた立柱石（上）と泊天満宮参道の板石の地蔵像（下）

出土遺物等 高橋、中山両氏の報告では、箱式石棺から二口の銅劍の出土が記されているが、いずれも聞き取り調査によるもので、現物を確認したものではない。古墳に銅劍が副葬される既往例は極めて稀でにわかには信じがたい。

一方、前述の御道具山二号墳では、調査時に二口分の鉄劍片が出土を確認したことは先に述べたが、材質が異なるものの、いずれも二口の劍が出土したとする報告内容の一致は気にかかる。発掘品の情報が泊大塚古墳と御道具山二号墳との間で入れ替わったことは想定できないだろうか。あくまで推測の域を出ないが、両古墳の埋葬施設がともに箱式石棺であったことが呼び水となり、相互の情報が錯さうした可能性も想起される。この場合、高橋の最初の報告にあった管玉の出土も、あながち誤りではない可能性もある。

また、古墳から掘り出されたもので留意されたのが種信が報告している「獣の形に似たる石」である。種信はこの「石」について、県南から中九州の中〜後期古墳に広く分布する「石人石馬」、あるいは奈良市の伝那富山墓の墳周に樹立されている隼人石などを類品として提

示しながら考察しており、種信の幅広い知識の一端を垣間見せている。しかし、報告文に「石」の出土時期、その具体的特徴や計測値などが記されていないことから、種信はこの「石」を実見したのではなく、聞き取りによって得た情報だった可能性が高いと考える。

種信は、『筑前国續風土記拾遺怡土郡』において、三雲端山古墳の墳丘上に「石佛」が立てられていたことを報告しており（註10）ことから、古墳と石造物との関係に強い関心を抱いていたことが、この記述の背景にあつたのかもしれない。

なお、現在、後円部に立てられた祠には、一辺一五cm、高さ五〇cmほどの花崗岩の立柱石が祀られている。（写真13上）。また、高橋は古墳付近の道端で「鎌磨地蔵」と呼ばれる石棺の棺材のような扁平の立石を目撃している。現在、大塚集落の周辺では高橋の報告を想起させる地蔵を見ることができないが、古墳の西南西一・三kmに位置する泊天満宮の参道にある地蔵堂には石棺材とみられる粗面玄武岩の板石が地蔵として祀られており（写真13下）、高橋の報告を検証する上では留意すべき資料であろう。泊大塚古墳の埋葬主体は箱式石棺ないしは竪穴式石槨と考えられることから、この部材が先行して掘り出されていた可能性もあるのではなからうか。

五. おわりに

泊大塚古墳について『筑前国續風土記拾遺』の記録を足掛かりに新集資料も加えて、同古墳の規模・形状について検討を加えた。今回の成果は最終的には昭和三六年の古墳形状から検討を加えたものであり、築造時の形状にまで遡及して詳論することは憚られるが、期待も込めて述べれば、当該古墳の平面形が「纏向型前方後円墳」の特徴を示していることが指摘できる（註11）。後円部が倒卵形を呈し、前方部との接続部が緩やかにくびれ、前方部端に向けて低く小さく開く特徴は、まさに定型化前の前方後円墳の姿と言えるだろう。

現状から導き出される墳丘各部の法量比が墳丘全長…後円部径…前方部幅 76・46・33となり、3・2・1とする「纏向型前方後円墳」

四、大正時代の踏査記録にみる埋葬施設

種信は、墳丘上にあつた社殿の地面を踏んだときに地下から共鳴音が聞こえたとし、空洞が存在すると考え、埋葬主体は石棺（箱式石棺）であろうと推定した。この推定が正しければ、石棺が地表直下の浅いレベルに埋設されていたことになるが、その後で墳頂部が大きく削平されたのであれば、現在、石棺が墳丘下に残存している可能性は低いと考えられる。

このことを裏付ける資料として、大正期に発表された同墳に関する三編の報告文がある。このうち二編は、高橋健自が大正五年に発表した「銅矛銅劍考」（一）及び「銅矛銅劍考」（二）である（註7）。高橋は、まず（一）において、銅劍二口とともに管玉が出土したことを簡潔に報告している（史料①）が、続く（三）では、管玉の出土報告を取り消すとともに、埋葬施設についての見分結果を詳しく報告している（史料②）。

この二編の報告によって、種信が実見した熊野権現神社は、明治期に合祀が行われ、大正二年に元の社殿が解かれたこと（註8）。高橋が現地を訪れた際に、赤色顔料が塗彩された箱式石棺片とみられる石材が散乱しており、既に破壊に瀕した状況であつたことがわかる。

これに続いて中山平次郎も、『九



写真 11 御道具山1号墳を北西部谷から見上げた風景（昭和59年）

州北部に於ける先史原史兩時代中間期間の遺物に就（二）」のなかで、詳細な報告文を寄せている（史料③参照）（註9）。

しかし、中山の報告の中心は泊大塚古墳ではなく、近接する御道具山1、2号墳に関するものであつた。御道具山1号墳は前方部が大きく盛り上がる形状であることから、これを二基の円墳と誤認し、東に隣接して築かれた2号墳と併せて三基の円墳と記している（写真1）。

注目されるのは御道具山2号墳の主体部に関する記述である。中山が踏査した時点で既に2号墳は盗掘を受けており、赤色顔料が塗彩された箱式石棺の破片が周囲に散乱していたと記されている。この石材が大塚古墳の墳頂部で実見した石材と同じ材質であつたことを記している。現在の泊大塚古墳には、石棺材と考えられる石材片を確認することができないので、主体部に関する情報として貴重である。

御道具山2号墳は、昭和六二（一九八七）年の1号墳の墳丘確認調査にあわせて中心主体部の確認調査も実施し、中山の報告どおり箱式石棺であつたことを確認した。使用された石材は板状の粗面玄武岩であつた。（写真12）中山の見立てが正しいとすれば、泊大塚古墳の後円部で破壊された箱式石棺も粗面玄武岩の板材であつたことになる。

なお、御道具山2号墳では、発掘調査の際に箱式石棺の攪乱土壌から二口分の鉄劍片が出土しており、泊大塚古墳の副葬品について検討する上で新たな悩ましい発見となつた。



写真 12 御道具山2号墳盗掘坑から出土した石棺材粗面玄武岩の板石で表面に赤色顔料が付着していた



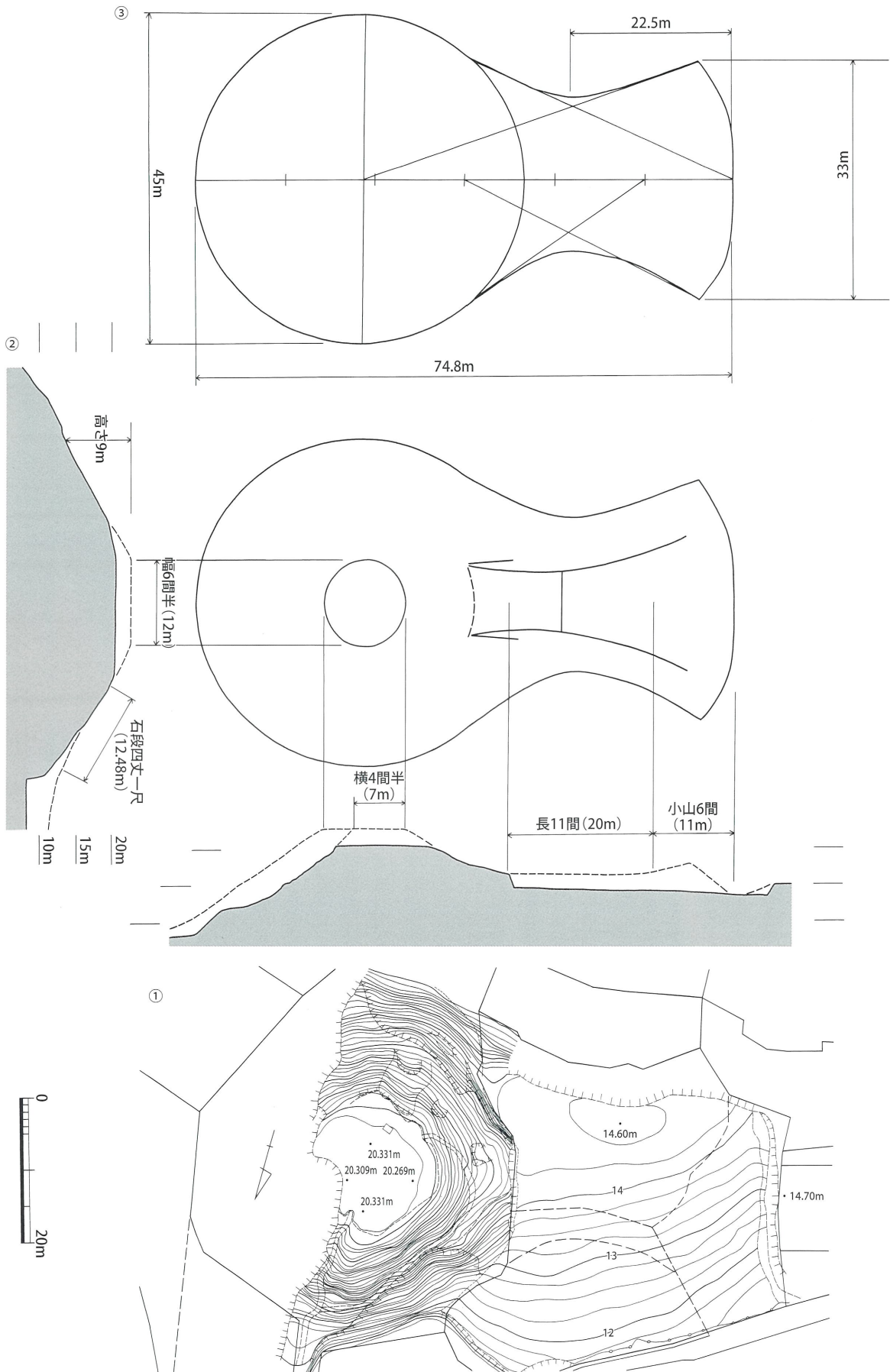
写真 10 泊大塚古墳の航空写真 (1961 年撮影)



第3図 泊大塚古墳周辺の地籍図 (1960 年作製 1/2,000)

後円部の平面形は、正円ではなく倒卵形を呈し、後円部の最大幅部からクビレ部に向かって直線的にすぼまるものの、クビレ部はコーナーが丸みを帯びてなだらかに反転し、小さく撥形に開いている。前方部前面墳端の形状は、木立に阻まれ十分な観察はできないが、南西隅角(写真右下)付近は、やや膨らみを有しているように見える。さらに、当該地点の古い地籍図の有無を調査したところ、昭和三五(一九六〇)年に行われた国土調査時に作成された地籍図(縮尺一〇〇〇)が保存されていることが判明した(第3図)。これによると、前方部は西裾を含めた方形プランの幅広い一筆地であったものの、前方部上面と裾部の傾斜変換線が補助線(点線)で書き込まれており、先の航空写真から想定される前方部の上場、下場ラインとほぼ合致することが判明した、左右のクビレのラインは、航空写真よりも左右対称形を呈し、奮丘の旧形を比較的良好に残している可能性が高いもの

と判断された。この成果を元に、現在の地形測量図に昭和三六年当時の前方部の墳丘ラインを書き添えたのが第 図である。崩落の進んでいる後円部前面の裾も、現在の地籍図の境界線にほぼ合致しており、前方部の形状と併せて墳丘の旧形を復原する上でかなり有効な資料となることを期待させた。ここから導き出される墳丘規模は、全長七四・八^尺、後円径四五・六^尺、前方部長二二・五^尺、幅三三^尺、クビレ部幅二二・二^尺となった。無論、導き出された数値は、航空写真と地籍図を元に推定したもので、正確さにおいては不確かなものと言わざるを得ないが、種信が示した後円部の径と前方部長は、実際の計測値に近似していることから、少なくとも昭和三六年当時の形状は、種信が計測した当時の姿から大きく変容したものではないと考えられる。



第2図 泊大塚古墳残存墳丘地形（1988年測量）・地籍（1960年作製）合成図①・墳丘旧地形推定図②・墳丘プラン規格推定図③



写真9 現在の後円墳頂部

右奥のブロックの囲いが大塚神社の祠である。

墳頂部は、平坦ではなく中央がわずかながら陥没しているなど凹凸があり、主体部の掘り起し等が行われた可能性がある。

また、埋葬施設として箱式石棺1基だけを埋葬するのであれば、空間として広すぎる感があり、頂上部の削平の可能性や埋葬施設の規格、内容についても広く検討する必要がある。

でいたことが原因と考えられる。このことから、すでに種信の实地調査の時点において、墳丘東斜面の崩壊が始まっており、墳丘頂上部の損壊も進んでいたのではないかと考えられる。

また、現在の計測値がいずれも種信の計測値よりも大きくなっていくことから、現在の墳丘頂部は種信の調査時点よりも大きく削平されて低くなった可能性が高いと考えられる。そこで現在の墳丘斜面の勾配を生かしたまま、墳丘高をかさ上げし、墳丘の縦横幅を種信が計測した墳頂部の値に近づけようとすれば、現在よりも二倍ほど高く想定する必要が生じ、墳丘高は九倍ほどとなる(第2図②)。

なお、後円部東側の墳丘崩壊面の土層を観察したところ、頂上付近まで赤褐色ロームの地山で、明瞭な版築盛土層が確認できなかったことから、墳丘は丘尾切断と地山成形を基本として築造されたと考えられる。

前方部 種信は、前方部を「尾」と表現したことから、当初は前方

部が撥形に大きく開く形状ではないと推測した。昭和二五年当時の付近の航空写真を見ると、後円部から西側に畑地状の白い区画があるのを確認することができるので、これが前方部に該当する可能性が高いと考えたのである。種信は、前方部の先端付近を「小山」と表現し、墳丘に向かつて若干盛り上がりつついたことを想起させるが、高さについての具体的な計測値が示されていないため詳細は不明である。前方部の長さは、墳丘のクビレ部から墳端部に向かつて十一間(二十尺)ほど伸び、さらにその先は「小山」状に盛り上がりその平端面が六間(十二尺)ほど続いているとしている。「小山」の実態は不明であるが、この数値から前方部の長さが三十一尺はあったということになる。

周溝 種信は、後円部のまわりを囲む水田が周濠の痕跡と推定した。確かに、現在も後円部の周囲に放状に民家が囲んでおり、その外側に水田がめぐっている。しかし、古墳の裾から水田まで三〇尺以上離れているうえ(第1図)、墳丘裾との比高差も5尺ほどあり(写真6)周溝とは考えられない。ただし、その内側の集落域に墓域表示ないしは一部に区画溝が存在した可能性は残されている。

2. 墳丘解明の新資料

種信の記録によって、古墳の規模、概況を把握することができたが、前方部の形状については、詳細までを明らかにすることができずにいた。昭和三九年には前方部の墳丘が削り取られており、現在はその姿を確認することができない状況となっている。

ところが、最近になって、国土地理院によって昭和三六年五月に撮影された泊大塚古墳近隣の垂直航空写真が公開されていることを知った(写真10)。高解像度の画像を入手し、拡大観察すると、後円部の西側に連接された前方部を確認することができたのである。

写真を見ると、現在、後円部の墳裾と推定している墳丘の立ち上がりは、墳丘二段目の立ち上がりである可能性が高まった。このため後円径は従来の推定値(四五尺)よりも大きくなり、最大で四五・六尺程度となることも想定され、種信の計測値に近づく。写真を元に推定した古墳の平面形は第2図②に示した通りである。

青柳種信が見た泊大塚古墳

『筑前国續風土記拾遺』に記された糸島半島の古式前方後円墳

岡部 裕俊（伊都国歴史博物館）
中牟田寛也（伊都国歴史博物館）

一. はじめに

福岡藩の国学者として知られる青柳種信は、三雲南小路遺跡の見聞記として著名な『柳園古器略考』に代表されるように、糸島地方の古代遺跡についての多くの記録を残したことも知られ、いずれも当該地方の歴史を検証するうえで必携史料として高く評価されている。

種信の数ある業績の一つに上げられる編著書『筑前国續風土記拾遺』（註1）にも古代遺跡や古墳に関する情報が掲載されており、当地にかかる記載のなかにも、飯氏兜塚古墳、三雲端山・築山古墳、怡土古城（現雷山神籠石）など重要遺跡についての記録が収められている。

これら一連の考古学的記録のひとつに泊大塚古墳がある。同古墳は、現存する後円部の径が四五 m を測り、今回の検討によつて糸島半島では最古段階の前方後円墳である可能性が高いことが判明した。近隣の九州大学伊都キャンパス内に所在する前方後円墳群とともに、旧志摩郡域、ひいては糸島地方の古代史を研究する上で重要な古墳の一つと考えられる。

本稿では、種信の記録に加え、大正時代に古墳を相次いで訪れた高橋健自、中山平次郎らによる踏査記録も再検討し、さらに市教育委員会が実施した墳丘の測量成果や、近年公開された古墳周囲の航空写真など、古墳に関する諸情報を整理し、そこから得られた新たな知見について報告したい。

なお、本項の執筆分担について、二章の文中の文献解釈については中牟田が主となって担当し、他は中牟田と協議しながら岡部が執筆した。

二. 泊大塚古墳の現状とこれまでの調査

泊大塚古墳は、糸島市泊字大塚六二六・六三五番地に所在する前方後円墳である。糸島半島の中央を占める広い丘陵帯の南東端に派生する標高一〇〇〜二〇 m ほどの舌状丘陵の先端部に位置し（写真1）、南に派生する丘陵上に築かれた御道具山一、二号墳とともに泊大塚古墳群を形成する（第一図）。古墳の築造当時は、眼下に広がる水田地帯が博多湾から湾入した内海（古今津湾）であったとされ（註2）、古墳群は、この内海を強く意識して築かれたと考えられる。

古墳を含めた集落一帯の呼称として「大塚」が用いられており、現在も後円部の頂上には「大塚神社」と称する祠が祀られ、春には祭典が毎年欠かさずに行われているという。古くから地元の人々を集めてきたことをうかがわせる。また、古墳の裾を通る道路は墳丘を避けるように大きく蛇行して敷設されており（第一図）、地域のランドマークとして不可侵の觀念が強く働いてきたものと推定される。

しかし、昨今の泊大塚古墳は、後円部の東側墳丘が崩落を繰り返し損壊の度合いが増しており、民家が隣接したことも手伝ってか、法面は大きく抉り取られた状況を呈している（写真2）。また、昭和四〇年前後には前方部が果樹園の開墾のために削平され（写真3）、現在は、あたかも円墳のような状態へと姿を変えてしまった（写真4）。まさに満身創痍の状況を呈しており、今後の保存については一刻の猶予も許さない状況となりつつある。

一方、当該古墳の詳細についての考古学的な検討資料は少なく、昭和四九（一九七四）年に刊行された『前原町文化財地名表』（以下、『地名表』）に半壊した前方後円墳であることと、円筒埴輪が出土した旨



糸島市立 伊都国歴史博物館紀要

第13号

発行日 平成30年3月31日
発行 糸島市立伊都国歴史博物館
〒819-1582
福岡県糸島市井原916
印刷 株式会社重富印刷
〒819-1119
福岡県糸島市前原東3丁目1番8号
TEL (092) 322-0191